

の事なれば、俳壇の地位も略ぼ確定し、土木などに關係すべしとも思はれずと云ふものあれども、是れ畢竟彼れの人物を知らざるが爲に、斯る説をも出すなれ、彼れは最初よりして、世の所謂風雅の士と異なり、人事の實際を忘れ、徒らに花鳥風月にのみ懷を遣るが如き文士肌の人にあらず、素より相應に事務の才をも有し、又一途にそれを煩はしとのみ思ひたるにもあらず、隨て上水工事の世話を務むる位の事は、當然あり得べき事なるべし。但だ其の年代に就て、『俳家奇人談』には、

寛文の末つ方、東武に下り、礪川の水道修成備夫となつて功を終るの頃、薙髮して風羅坊と云ふ、

是れ延寶八年より約九年以前の事にて、恰も東下の當分なれば、或は其の頃を以て事實とするが可なるべきに似たり、兎に角、彼れもまた一時は賤業になつさわりて、糊口の資を得たるは、疑ひなきことなるべし。

桃青東下の頃、江戸の俳壇は、貞徳門の俳諧稍や勢力を失ひ、談林の驍將田代松意、巖に宗因と大坂に分れ、今は江戸に在りて、談林の俳諧を鼓吹し、江戸の俳風殆んど悉く之れに風化されんとするの有様なるに當り、延寶三年、宗因自から江戸に來り、「談林十百韻」を興行したれば、談林派の勢力益々盛んにして、貞門の俳人、亦た一轉して宗因の風調を摸擬するもの多し。延寶四年には安靜、胤及、玖也、忠知等相次で没し、又宗因の『五百韻』、『天滿千句』、『西鶴の『大矢數』杯續々梓に上り。其の翌五年の春、芭蕉、素堂との『兩吟二百韻』は成れり、其の卷頭に掲げられたる、

梅の風俳諧國に盛なり 信章
こちとうつれも此時の春 桃青

の發句は、全く談林派の盛大を形容したるものにて、梅の風とは慥かに梅翁宗因の談林を意味し、その脇として、桃青のつけたる句も、之れに向ふの心を示

8.18

芭蕉 宗因と
會す

したるや明かなり。而も又同年の催しに係れる「延寶二十歌仙」の作者には、杉風、卜尺、嵐蘭、嵐亭治助(嵐雪)、螺舎(其角)等の諸俳家あり、判者の桃青なりしを見れば、桃青は當時早く既に此等の諸門弟を有したりしを知るべく。翌延寶六年の春、桃青、信章、信徳との三吟、其の秋桃青、似春、四友との三吟、及桃青、似春、春澄との三吟などあり、俳壇に於ける桃青の地位は、漸次進歩の跡を示せり。

此の年貞門にては、山本西武、半井卜養、平澤定門等の先輩此の世を去り、談林にては、菅野谷高政「中庸姿」を編んで貞門との衝突を醸し、岡村不卜は「江戸廣小路」を編み、池西言水又「江戸新道」を出して、貞門の俳人にして、談林に傾きたる輩の句を載する等、俳壇は終に談林派の爲に勝を制せらるゝのみならず、其の翌延寶七年には、桃青三十六歳にして、始めて西山宗因と相會して俳を談する迄に至り、同八年には貞門の重鎮松江重頼没し、次で椋梨一雪去り

而して蕉門の「田舎句合」、「常盤屋句合」の二書新に世に出でたり。「田舎句合」は其角の發句、「常盤屋句合」は杉風の發句にして共に桃青の判せるものなり。延寶九年春、信徳の「七百五十韻」成り、天和元年桃青乃ち「次韻二百五十句」を編す、其角、才磨、揚水との四吟なり。蕉風開眼の句と認むべき。

芭蕉枯枝の吟

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮 桃 青

の句は、此の時代の作にて、桃青三十八歳なり。斯くて天和二年三月二十日石田未琢没し、二十八日西山宗因逝き、言水は江戸を去て京に歸り、東都の俳壇稍や寂寥たり。

桃青此の頃深川の草庵に芭蕉一株を植えて自から樂しみ、人々之れを芭蕉庵と云ふ、彼れに句あり、

芭蕉庵の稱號

芭蕉野分して盃に雨を聞く夜かな 芭蕉庵桃青

是れ彼が芭蕉庵と稱する初めに於て、彼れが「武藏曲」は此の時に於て、芭蕉の

詩想が、所謂幽玄閑寂の域に著しく歩を進めたるも此の時なるが、彼れの詩想に向つて、特に一大刺戟を興へたるものは彼れの參禪なり、禪味は實に芭蕉をして蕉風を開かしめたる大原因となれり。芭蕉の參禪は、決して世人の疑ふか如き、後世の附託にあらず、彼れの一生を歴史的に研究し、且つ其の俳諧を精讀玩味する時は、恐らく何人も、彼が臨濟宗に參せし者なることを否認し能はざるべし、芭蕉の初めて、禪門に入りしは天和年中にして、其の師は有名なる佛頂和尚にてありしなり。蝶夢和尚の文集に、

禪法は佛頂和尚に參して、三國相承統記につらなり、風雅は西行上人をしたひて、續扶桑隱逸傳に載ぬ。

と記せるは、以て一片の證左とするに足らん。但し芭蕉は天性禪味を帯びたる人にて、強ち此の度の參禪のみに依つて、幽玄閑寂の想を養ひたるに非ざる事は、其の參禪の時日の少なさに拘はらず、頓悟一番、一生の歸趨を定めて動か

芭蕉庵燒失
芭蕉の旅行

ざりしを見ても之を知るべし。天和三年冬深川の芭蕉庵燒失し、(一説に、天和二年なりと、これ或は是か)、貞享元年八月、伊賀に歸らんとして、東都を發足せり。同行者は油屋喜左衛門、千里と號し、大和國葛下郡竹の内村の人なり。此の時の紀行たる「野ざらし紀行」に、「なにかし千里と云ひけるは、此たび道のたすけなりと萬づいたはり、心を盡し侍る、常に莫逆の交深く、朋友に信ある哉」と記し、

深川や芭蕉を富士にあづけ行く　　芭蕉

の句を擧げたるを見れば、思ふに千里は蕉門屈指の忠臣たりしなるべし。此の一行東海道を経て、伊勢外宮を參拜し、西行谷を過ぎて、九月初め伊賀なる芭蕉の郷里に着し、暫らく滯留して、大和なる千里が故郷にゆき、芳野の奥に逍遙して、西行上人の遺蹟を訪ひ、後醍醐帝の陵に謁し、山を越えて近江路より、濃尾の間を巡遊し、再び踵を廻らして京路に入り、更に東海道に出で、

又甲州の山中に入り、翌貞享二年四月の末に至つて、東都に歸る、其の間凡そ九ヶ月を費したり。

此行、蕉風の擴張に最も功あり、芭蕉は多くの門弟を得たり。其の大垣に泊りし時は、杭瀬川の谷木因を以て、東道の主人となす、木因は船問屋にして通稱を善太と云ひ、又の名は木端、白樓叟と號し、杭瀬川の翁として知らる、固より尋常の俗物にあらず、芭蕉もまた敢て之を弟子視する事なかりしなり。其の尾州に行きし頃、笠は長途の雨に綻び、紙衣は泊りくくの嵐に揉め、佗び盡したる風流も、何となく哀れを感せざるを得ざるものあり、昔者狂歌の才士竹齋が、曾て亦た此國に漂泊したる當時を想ひ起しては、

木がらしの身は竹齋に似たる哉 芭蕉

と吟じ。名護屋にては、山本荷兮、南杜國、岡田野水等入門し、同年十二月、木がらしの句を巻頭にして六吟の五歌仙を興行せり、芭蕉七部集の第一巻に置

かれたる『冬の日集』は是なり。芭蕉四十一歳にして、蕉風の基礎、こゝに略ぼ成立したりと云ふべし。

此の行脚に於ける芭蕉の收穫は、「冬の日五歌仙」、「熱田三歌仙」及び前に記したる門弟の外、荊口、千那、尙白以下、十數名の秀才を得て、後來此地方に蕉風を弘むるの根據地を作りたる事是なり。再び江戸に歸りて後は、杉風の別業に宿し、貞享三年丙寅の春、『初懷紙』及び『春の日集』成る。『初懷紙』は又の名を『春の曉集』或は『鶴百韻』と云ふ、其角が「日の春をさすがに鶴のあゆみ哉」を立句としたる、其角、文鱗、松風、杉風、李下、舉白、千里等の百韻なり。『春の日集』は、七部集の一にて、荷兮、重五、野水、越人等の歌仙三卷、及び芭蕉並に杜國、荷兮、越人、如行、秋之坊の句を輯めたり。

貞享三年四月、芭蕉四十三歳にして、彼の有名なる、

古池や蛙とび込む水の音 芭蕉

の吟を爲す。「枯枝」の名句以來、實に五年目なり、其の後間もなく常陸に赴き本間道悦の門を叩いて、醫を學べり、芭蕉が此の時に及んで醫を學ぶは、何の爲めなりしかを知る能はざれども、彼れの自筆に係れる左の誓書、今も傳へて本間松江の家に在りとの、『隨齋諧話』の記事をして眞ならしめば、此の事強ち否認すべからざるが如し。

相傳醫術啓廼院一流秘書秘語那豈漏、他乎若於違背者大小神祇別而生緣氏神可蒙御罰者也仍而起請文如件

貞享三年丙寅四月十二日

物部道意判

松尾芭蕉判

本間道悦様

其の冬、深川に歸り、翌四年八月鹿島に下る、「鹿島紀行」あり。同行者は、河合會良、及び宗波の二人なり、會良は信州下諏訪の人にして、通稱惣五郎、後

ち宗悟と改む、此の人奥の細道にも隨身し、芭蕉の没後其の塚に泣て「おがみ伏して紅しぼる汗ぬぐひ」の句を手向けし芭蕉昵近の俳人なり、宗波は未だ何人なるかを知らず。鹿島に着して根本寺に宿し、八月の末江戸に歸り、越えて一月、神無月の初め、再び旅装をととのへて郷里伊賀に行く、此の道の記を「卯辰紀行」又は「芳野紀行」「笈之小文」と名く。翌年春再び芳野に遊んで、岐阜より名護屋に下り、更に迂廻して木曾街道を經、秋風に誘はれて江戸に歸る、「更科紀行」あり。

貞享五年九月、元祿と改元あり、此の冬は草庵に籠居し、翌二年春、荷今の「曠野集」成る。

「月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり」と書き起したる、奥羽行脚の首途は、即ち同年三月十七日にして、同行者は河合會良なり、千住驛より奥羽街道を下り、日光廟に詣で、那須野が原、白川、二本松、福島、白石、仙

臺を經て、松島、平泉等の勝を探り、北上川、衣川を過ぎて最上の庄に至り、尾花澤より立不寺に詣で、羽黒の山に登り、鶴岡より酒田港に出で、象潟の勝に遊び、北海岸に沿うて、越後より越中、加賀、越前を遍歴し、九月三日濃州大垣なる如行の家に投じ、茲に此の旅行を終るまで、費す所凡そ百六十日、此の行、彼れが俳想の上に、偉大の感化を興へたるは云ふ迄もなく、又實に蕉風の興隆に最も力ある大行脚たりしなり。

奥羽の旅行を終りたる芭蕉は、大垣に暫し旅の疲れを休め、同月六日、伊勢神宮新築の遷徙を拜せんとて此に赴き、それより伊賀の長尾峠を越えて奈良に赴く途上、

初時 雨猿も小篋を欲しげなり 芭蕉

と口吟し、京に上りては、嵯峨に遊びて、去來が落柿舎を訪づれ、此の年は江州膳所にて暮す。明くれば元祿三年、再び伊勢に遊び、此の時始めて入門せる

蕉門屈指の女秀才渡會園女の家に宿す、之より伊賀に行き、又江州に歸り、大津の濱田珍碩の爲に洒落堂の記を作る、『瓢集』は珍碩の選する所なり。芭蕉時に四十七歳、彼れを尊奉して翁と稱するは、此『瓢集』より始まれり。蓋し芭蕉の聲聞、天下に普く、彼れが曾て師事せし北村季吟父子、及び伊藤坦庵すら尙ほ芭蕉翁と稱するに至れるを以て、門人等は特に之を呼ぶに翁の尊稱を以てしたるなり、然るに芭蕉は、自から謙抑して斯る尊稱を用ふるを厭ひ、固く門人を戒められたれば、後の『猿蓑集』には、翁の名を用ひずして、矢張芭蕉と書せり。江州の風色、夙に芭蕉の心に協ひ、奥羽歴遊の後、概ね此に留錫し、中にも木曾塚なる無名庵の風月を樂めり。幻住庵も亦た湖頭石山の奥に在り、門人菅沼曲翠の伯父、幻住老人の住馴れし草庵なりしが、荒廢既に久しかりしを、元祿三年四月、修理して、芭蕉が起臥の處となす、有名なる「幻住庵の記」あり、此の記、如何にも能く彼が佗居の狀を叙し、光景歷々として眼前に髣髴するも

のあれば、左に之れを録せん。

幻住菴記

芭蕉 艸

石山の奥、岩間のうしろに、山有園分山と云、そのかみ園分寺の名を傳ふなるべし、麓に細き流れを渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たせたまふ、神燈は彌陀の尊像とかや、唯一の家に甚忌なる事を、兩部光を和け、利益の塵を同しうしたまふも、又貴し、日比は人の指さりければ、いと神さび物しつかなる傍に、佳捨し草の戸有、よもき根征軒をかこみ、屋れもり壁落て、狐狸ふしとを得たり、幻住菴と云、あるしの俗何かしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年斗むかしに成て、正に幻住老人の名のみ残せり、予又市中をさる事十年斗にして、五十年やちかき身は、糞虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象瀉の曇き日に面をかかし、高すなこあゆみくるしき北海の荒磯にきひすを破りて、今歳湖水の波に、漂嶋の浮葉の流とどまるべき、芦の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣れ結添なごして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やかて出しとさへおもひそみぬ、さすがに春の名残も違からず、つち咲残り、山藤松に懸て、時鳥しはく過る程、宿かし鳥の便さへ有を、木つきのつくともいとはしなと、そゝろに興して、魂吳楚東南にはしり、

幻住庵

身は瀟湘洞庭に立つ、山は未中にそはたち、人家よきほごに隔り、南嶺峯よりおろし、北風海を渡して涼し、日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城有橋有、釣たる舟有、笠とりかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛かふ夕闇の空に、水鶏の叩音、美景物としてたらずと云事なし、中にも三上山は、士峯の傍にかよひて、武蔵野の古き柵もおもひいてられ、田上山に古人をかかふ、さゝほか嶽、千丈が峯、袴腰といふ山有、黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにそとよみけん、萬葉集の姿なりけり、猶眺望くまなからむと、後の峯に道のほり、松の柵作葉の圓座を敷て、猿の腰掛と名付、彼海棠に菓をいとなひ、主簿峯に菴を結へる、王翁除佐か徒にはあらず、唯唾辟山民と成て、屏風に足をなげ出し、空山に虱を捫て座す、たましく心まめなる時は、谷の清水を汲て自ら炊く、とく／＼の罨を倦て、一爐の備へいとかるし、はた昔住けん人の、殊に心高く住なし侍りて、たくみ置る物すきもなし、持佛一間を隔て、夜の物おさむべき處なご、いさ／＼かしつらへり、さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何かし殿子にて、此たび洛にのほり、いまでもかりけるを、ある人をして額を乞、いとやす／＼と筆を染て幻住菴の三字を送らる、頓て草菴の記念となしぬ、すへて山居といひ、旅寐と云、さる器たくはふへくもなし、木曾の檜笠、越の菅蓑斗、枕の上の柱に懸たり、菴は稀く／＼とふらふ人々に心を動し、あるは宮守の翁、里のおの共人來りて、いのしの稻くひあ

らし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ては、影を伴ひ、燈を取ては、罔雨に是非をこらす、かくいへばとて、ひたふるに閑寂を好み、山野に跡をかきむとにはあらず、や、病身人に倦て、世をいとひし人に似たり、借年月の移こし、拙き身の料をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛羅祖室の扉に入らむとせしも、たとりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして、此一筋につながらる、樂天は五臓の神をやぶり、老杜は瘦たり、賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやとおもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木も有夏木立

猿蓑集成る

蕉風の俳典として、最も尊重さるる『猿蓑集』は、元祿四年春、去來、凡兆の二人が師命を奉じて選ぶ所なり。

芭蕉は、京洛及び江州の間に留錫すると凡二年、元祿四年十一月初江戸に歸り、翌五年の暮を橋町に迎へ、夏、深川の草庵を再興し、門人互に良材を喜捨して侘びたる數寄屋を作り、且つ五株の芭蕉を植う。元祿六年は、深川に留りて、都門の外に出でず。翌年の春、『炭俵集』及び『別座敷集』成る。

元祿七年五月十一日、彼れは上洛の途に上らんとして、四度び深川の草庵を出づ、何ぞ知らん、是れ東都に於ける、彼れが最後の日ならんとは。此の行、名護屋に荷兮が家を宿とし、京に上りては去來が落柿舎、支考が東山の草堂を訪ひ更に膳所の曲水、大津の木節が門を叩き、七月伊賀に歸り、支考惟然と共に、大和に行脚し、九月中旬浪花に至り、二十八日園女亭に遊び、

白菊の目にたてゝ見る塵もなし 芭蕉

園女亭の響應

を立句として歌仙一卷あり、園女山海の珍珠を盡して、歡待到らざるなかりしが、豫て胃腸を害し居たる所に、此の響あり、殊に葷を多食したるが爲めか、二十九日夜より腹部に疼痛を感じ、泄瀉數行、胃苓湯を服したるも効驗なく、「大津の木節は、よく我が平生を知れり、之を招くべし」との芭蕉の言に依りて木節を招き、又「語るべき事あり」とて去來を呼ぶ。家狭くして看護に不便なれ

ば、十月三日、今まで宿泊せる之道の亭より、新たに借り受けたる御堂前南久太郎町花屋仁左衛門の裏座敷に轉宿せり、隨從の惟然、支考、之道は云ふに及ばず、通知に接して馳せ集れる、去來、木節、舍羅、吞舟、丈草、乙州、正秀等の十人枕を擁して、看護に怠りなし。其の他多くの門人知友、翁の病を聞いて來り集まるもの甚だ多かりしが、十人の門弟、之れに應接して好意を謝し、何れも病褥に引かず。木節は病の重きを見て他の醫を聘せんとを勧めたれども「我は木節が診治に安んじて、他に求むる心なし」とて、遂に肯んせず。辭世の句を問はれて、「昨日の發句は、今日の辭世、今日の發句は、あすの辭世、我が生涯云ひ捨てし句に、一句として辭世ならぬはなし」とて、更めて句を吐かず。九日、丈草、去來等を床近く招き、吞舟に筆を執らせて、

旅にやみて夢は枯野をかけ廻る

芭蕉

と書かしめ、「是は辭世にもあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の吟な

り、然れども生死の大事を前に置きながら、如何に生涯好みし風流とは云ひながら、是も妄執の一つとも云ふべけん」と云へり。泄痢前日は六十回、此の日は數知れず、衰弱益々加はる。十一日其角來る、此の夜は一同夜伽せり、惟然前夜正秀と同じ蒲團に寢て、互に引合ひ、終夜眠らざりし事を想ひ起し、

ひつぱりて蒲團に寒き笑ひ哉

惟然

と興じ、芭蕉も珍らしく微笑を漏す。其の翌日、芭蕉は強て沐浴を命じ、次郎兵衛に抱へられて正座し、其角、去來、丈草を正面に、其の他の門人を左右に置き、惟然、支考に遺言を筆記せしめ、自から伊賀への書狀を認め、萬事残りなく言ひ終りて合掌し、靜かに觀音經を念じ、五十一歳を一期として、眠るが如く逝けり、實に元祿七年甲戌十月十二日申の刻なり。

翁の墳塋は、近江國大津なる義仲寺にありて、其角の筆に成れる、「芭蕉翁」の三字、碑面苔蒸して、湖頭の松風、今猶ほ昔を偲ぶ。

貞享元年、初めて蕉風を起してより、東西の遊歴十一年、天地に同化して俳想を練り、自然を諷詠して胸懷を叙す。此の間門に入る者、無慮數千人、全國到處門人のあらざるなく、俳壇の大勢は遂に芭蕉の占有する處と爲り、苟も俳を談ずるものは、蕉風を云はざるなく、俳諧は蕉風に至て略ぼ大成を告げたるものと云ふべし、詩人としての芭蕉は云ふ迄もなく、彼れは人物として、又大に尊敬を拂ふべき品性を有し居れり。

第四章 芭蕉の俳歴

附蕉風の變遷

芭蕉少年時代の句

芭蕉の少年時代に於ける發句は、古書の傳ふるもの甚だ稀れにして、僅かに正確と認むべきは、寛文十二年正月に成りたる「貝おほひ」に載せたる左の二句に過ぎず。

來ても見よ甚べが羽織花ころも

宗房

女夫鹿や毛に毛が揃ふて毛むつかし

同

是彼れの發句として、世に残れる殆んど最初のものなるべく、又其の俳諧の如きも、季吟の門に在りたる頃は、純然たる真門古風の附方にて、他に何等の異なる所なく、延寶五年に於ける素堂との兩吟二百韻も、依然として貞徳流俳諧の面影を存するに過ぎざれば、改めて此に示すの必要なきも、同年冬素堂、信徳との三吟に至ては、

あら何ともなやきのふは過て河豚汁

桃青

寒さしどつて足の先きまで

信章

居合ぬきあられの玉や亂すらん

信徳

拙者名字は風の篠原

青

相應の御用もあらは池の邊り

章

海老さこましりに折ふしは鮒

徳

醬油の後は湯水に月すみて

青

更てしはく小便の露

章

發句と云ひ、附味と云ひ、既に談林の風を帯び、又同年の「延寶二十歌仙」、及び、翌八年の『田舎之句合』『常盤屋之句合』等は、純然たる談林そのまゝなり、殊に桃青が判して以て勝ちとせるは、主として談林の格調を示し、敗を取りたる中には、却て凄味ありて蕉風の幽玄に近づけるものあるは、寧ろ不審と思はるゝ程なり。試みに田舎、常盤屋兩句合の勝句とせるものを左に示さん。

田舎之句合

| | | |
|-----------------|---|---|
| 春の水やかろく能書の手を走らす | 其 | 角 |
| 今案ずるに寒の家には自身番 | 同 | |
| 鶯に乗て春を送るに白雲や | 同 | |
| 何と夏羽折縮緬は重し紗は輕し | 同 | |

袖の露も羽二重氣にはぬぬもの也 同

常盤屋之句合

| | | |
|----------------|---|---|
| 花よりも猶目うどの春の紅は | 杉 | 風 |
| 青わさび蟹が爪木の斧のおと | 同 | |
| 干大根よめ菜を戀るおとろへは | 同 | |
| 獨活の千年能なし山の柗木かな | 同 | |
| 都人山椒を藤の若菜とて | 同 | |

桃青は是等の句を、珍重と譽め、秀逸と賞し、且つ『常盤屋之句合』の終りに書して、

詩は漢より魏に至るまで四百餘年、詞人才子文躰三たびかはるといへり。和歌の風流代々に革まり、俳諧年々に變し、月々に新なり。今こゝに青物の種々を集め、二十五番の句合となして、予が判を乞ふ。誠に句々たをやかにつ

芭蕉桃青時代の句

くり、新しく、見るに幽なり、思ふに玄なり。是を今の風躰といはんか云々。といふに至つては、彼れの眼識伎倆、未だ幼稚を免れざると共に、當時の俳風が、單に句調の上の玩弄物たるに過ぎず、彼の所謂「幽玄」の二字も、また大に其の後のものに異なる所あるを思はざるべからず。次に彼自からの句として、寛文延寶より天和に至る頃のものを示さん。

| | |
|------------------|---|
| 庭訓の往來誰文庫より明の春 | 桃 |
| 發句あり芭蕉桃青宿の春 | 青 |
| 猫の戀窠のくづれより通ひけり | 同 |
| しら魚に價あるこそうらみなれ | 同 |
| 時鳥まねくか麥のむら尾はな | 同 |
| 燕子花似たりや似たり水の影 | 同 |
| 夕顔に見とるゝや身もうかりひよん | 同 |

| | |
|----------------|---|
| 張ぬきの猫に見えけりけさの秋 | 同 |
| 秋來にけり耳を尋て枕の風 | 同 |
| 七夕のあはぬ心や雨中天 | 同 |
| 八朔や天の橋立たはね熨斗 | 同 |
| ゆく雲や犬の迹ほえ村時雨 | 同 |
| 火吹竹音やしくれて小豆めし | 同 |
| 小野炭や手習ふ人の灰せゝり | 同 |
| 一休か土器かはむ年のいち | 同 |

凡そ物は一足飛びの變化を爲さず、桃青の俳句が、談林の格調より將に蕉風に移らんとするにも、漸を追うて、之れに赴きたるや云ふ迄もなし、左れば寛文延寶、天和の作句は、一派の人々より、蕉風開眼の實際の名句なりと稱せらるゝ「枯枝」の句以前の作なるも、其の間また既に貞享、元祿の俳味を含みたるも

のあり、「枯枝」の句以後と雖も、又稍や談林に近きもあるべし、唯た大勢の徐ろに一方に推し移るを觀るべきのみ。殊に最も注意すべきは、信徳の七百五十韻成るに及んで、天和元年、桃青が其角、才丸、楊水と共に次韻二百五十句を繼ぎたる事にて、其の談林の調を脱せざるに拘はらず、是れ正しく貞派の陳腐、談林の浮華を厭ひ、新風開發の進路を示したるものと云ふべく、去來も「先師は桃青歌仙より、次韻に變じ、更に冬の日に轉じたり」と云ひ、傳に「桃青此の時其角、才丸等と謀り、貞派の調に愧まず、談林の輕浮を脱して一旗幟を樹てんとしたり」とあるを見ても、氣運の如何に動きつゝありしかを察するに足る、有名なる「枯枝」の句は、此の時代に作られたり。

蕉風開眼の句

蕉風(或は正風)の開眼は、「枯枝」の句を以て之れに擬するか、但しは「古池」の句を以て之れに充つるか、近時俳論家の所説、二様に分れ居る如くなるが、言水の『東日記』に記する所を見るに、

今は六十年も以前、世の俳風とはくして桃青と申せし頃は、

大内 雛人形天皇の御宇とかよ

あやめ生り軒の鯛のされかうべ

杯、かゝる姿の句もいだされ候、梅翁など談林の棟梁として、枝になま疵絶なんだの最中に侍りしを、季吟もなげかせられ、桃青、素堂と閑談あり、今の俳風うち和ぐるかたもやと、三叟神丹を練て、桃青その器にあたる人と、おして勧められしによりかくの趣にもやと、

枯枝に鳥のとまりたる哉秋のくれ

と一句を定められし、是を茶話の傳と申なり(或問珍)

後年、「とまりけり」と修正して、絶唱の一と稱せらるゝは是なり。書中記する所の、桃青、季吟、素堂の三人が、新風の開發に神丹を凝すの一事は、三士其の派を同じうせざるだけに、聊か不審に聞ゆる所なきに非ずと雖も、「或問珍」

は嵐雪の語る所を筆記したるものなれば、此の説強ちに排斥すべからざるのみならず、前後の關係より察するに、芭蕉もまた、何とかして、俳壇刷新の氣運を捉へんとしつつありし際なれば、季吟、素堂等の先輩に對して、前途の相談を爲したるも怪むに足らざるべし。

「枯木寒鴉」は、古來漢詩に有り觸れたる思想にして、必ずしも珍らしと云はれざれども、其の思想を發句に移したるは、全く芭蕉の手柄にして、彼れが蕉風の骨髓として、終生唱道して已まざりし、閑寂幽玄の思想を、第一に實現したるは、此の一句にあり、此の一句を、蕉風立脚の根據と稱して、固より何等の差支なく、爾來文學として見るべき發句は、實に此に胚胎せりと斷言して毫も正鶴を誤らざるべし。次で出でたるは「武藏曲」なり。

武藏曲

梅柳さをそ若衆かな女かな

桃 青

夕貌の白く夜の後架に紙燭とりて
芭蕉野分して盃に雨を聞く夜哉

同 同

深川冬夜感

櫓の聲波をうつて腸氷る夜や泪
名盛や作戀五郎花さし交
草の戸や犬に初音を隠者鳥

桃 青
其 角
同

秋夜話隱林

雨冷かに羽織を夜の蓑ならん
梅咲けり松は時雨に茶を立る頃
櫻狩遠山辛夷うかれ來ぬ
海しらぬ山賤や生海鼠やく夕

其 角
松 風
嵐 蘭
同

池上偶成

池はしらす龜甲や汐を干す心

素堂

舟あり川の隅に夕涼少年歌うたふ

同

蘇鐵鳴て老母草は霜の笑草

ト尺

酒の聲なき月は寄_レ爐_二鳴_レ栗

才 嚙

鳥恨めり櫻の敵杉の妻

千 春

晝顔の宿冷食の白くなん咲ける

曉 雲

是等の句を一讀するに、想は漸く蕉風に近づき、又稍や客觀的に移りたるもの如くなれども、形は談林の宇餘りそのまゝにて、随分讀み難く、又解し難きもの多し、但し此の俳風の流行は、其の時期甚だ長からず、延寶の末、天和の初めより、天和三年發行の『虚栗』に至て、其の極に達し、間もなく蕉風に歸する迄、謂はゞ過渡時代に於ける、一種の變調とも、稱すべきものならん、『虚栗』の風調は左の如し。

虚栗調

愛方知_二酒聖_一

貧始覺_二錢神_一

花にうき世我酒しろく食くろし

芭蕉

憶_二老杜_一

毳風を吹て暮秋歎するは誰が子ぞ

同

夜着は重し吳天に雪をみるあらん

同

茅舎買_レ水

水苦く偃鼠か咽をうるほせり

同

天和三年試筆

鶴さもあれ顔淵いきて千々の春

其角

醉登_二三階_一

酒の瀑布冷麥の九天より落るならん

同

惜花不拂地

一九〇

我僕落花に朝寝ゆるしけり

同

傲白氏之隣女題

二星私憾となりの娘年十五

同

柳には吹かでおのれ嵐の夕燕

嵐雪

錦帳のうづら世を草の戸や郭公

同

時鳥の二聲三聲おとつれば

五月雨の端居古き平家をうなりけり

同

はせつるや水村山郭酒旗風

同

やまひこと啼く子規夢を切る斧

素堂

亦や鯉命あらば我も魴

同

うき葉巻葉この逆風情過たらん

同

荷をうつて罷ちる君みすや村雨

同

此の調は、單に發句のみならず、連句もまた其の餘波を蒙れり。

酒債尋常往處有

人生七十古來稀

詩あきんど年を貪る酒債哉

其角

冬湖日暮て鰓馬鯉

芭蕉

干鈍き夷に關をゆるすらん

同

黒鯛くろしおとく女が乳

同

枯藻髮榮螺の角を卷ならん

角

魔神を使とす荒海の崎

蕉

「虚栗調」とだに云へば、世人は直に字餘り亂調の佻儻敖牙なる俳句とのみ想像する如くなれども、其の實決して然らず、其中自から穩健雅馴にして、誦す

るに足り、將來蕉風の基礎となるべきものも少なからず。『虚栗』の一書は、談林と蕉風との過渡時代を研究するの材料として、最も興味あるものならんばあらず。

| | | |
|----------------|---|---|
| ほとゝぎす正月は梅の花咲り | 桃 | 青 |
| 髪あらふ驚芹とかす濱邊かな | 其 | 角 |
| まつ風の里は初するしぐれかな | 嵐 | 雪 |
| 行雁や見のこす麥の花さかり | 在 | 蕉 |
| 小雨けり露をしとゝのかくれ傘 | 露 | 章 |
| 郭公はるかに蜀の新茶かな | 才 | 丸 |
| 曉の釣瓶やすめよほとゝぎす | 濁 | 子 |
| わするなよ麥の穂風の初うつら | ト | 尺 |
| 白雲や富士の峽より江戸のぼり | 長 | 吁 |

うすものゝ羽織綱うつほたる哉

曉 雲

謫 居

象瀉の月や流人のたすけふね

琢 菴

旅 行

城見えて合羽はおもしゆきの昏

信 徳

以上述べたる如く、芭蕉は初め貞門の俳諧を學び、後談林派の風調を慕ひ、一轉して天和の漢詩和譯的俳諧を弄したるが、芭蕉の俳風は此に止まらず、更に蕉風を開き俳句史上に「新紀元を劃するに至りたり。既に上にも云へる如く、恰も之と時を同うして、攝州伊丹に上島鬼貫あり、蕉門の所謂蕉風に近き一體を創めたるも、其の徳、其の才、共に芭蕉に及ばず、而も其の業を承けて、師風を揚ぐるに足るだけの門人なかりし爲め、伊丹風の名は空しく俳諧史の一節に残り、鬼貫の遺跡としては、墨染寺の境内、時々篤志家に依つて、墓石の苔を

掃はるゝに過ぎず。芭蕉は天和の初め、既に談林派の餘韻に乏しきを感じ、是に天和の俳風を創めたれども、それとて單に文字を弄するにとゞまり、露骨にして佶屈、竟に永く諷詠すべきものにあらざるを知ると共に、是より先き、宗因が談林調俳諧の外に、往々閑寂幽玄の句を吐き、又鬼貫が老逕俊抜なる自然的の俳諧を吟じ、加ふるに其の門弟友人等が、時として談林以外に閑寂の俳諧を誦するを見るに及んで、早くも俳諧の眞價を此に認め、遂に、

古池 や 蛙と び 込む 水の 音 芭 蕉

の一句を吟じて、一世を驚かし、茲に愈々蕉風開眼の一段落を劃したり。此の句、芭蕉が俳想の骨髓とする所の、閑寂幽玄の趣を、一句の間に漏らす事、毫も疑を存せずと雖も、世人が賞讃する程の名句にあらざる事は、近時俳句を研究するものゝ、一般に認むる所にて、若しも句の可否より判定を下さば、寧ろ「枯枝」の句を以て、「古池」の上に置かざるを得ざるものあるべし、唯だ「枯枝」

の句を吐きたる時は氣運未だ熟せざりしが爲に、折角の名句も、左迄の賞讃を博せざりしに反し、「古池」の句を吐きたる頃は、氣運既に熟したるが故に、左迄の名句にあらざるものも、評判意外に高くなれりと云ふに過ぎざるべし。左れば正確に芭蕉の進路を研究せば、「枯枝」の句前後を劃して、時代を定むるに至當とすし、左れど、「古池」の句を以て、時代を定めんとする世間一般の習慣に従ふも、差して不可なりと云ふにあらず、要するに俳想俳形の變化にも、自から一定の順序あり、其の今日に至るには、序を透うて斯くなりたるものにて敢て偶然の頓悟に非ざる事を知らざるべからず。

芭蕉の俳句は、此の如くにして進歩し來り、此に蕉風の一體は、動かすべからざる堅固なる基礎の上に据ゑられたり。爾來彼れは其の本分を盡さんが爲に、東西の行脚に、天地自然を友として深遠なる俳想を養ふと共に、多くの門人を得て共に研究に耽り、歲月を重ねると共に益々成熟の期に入り、貞享四年、其

角の『續虚栗』なり、元祿二年には『曠野』、同三年には『ひさご』なる。此の集他門の俳句をも網羅し、蕉風の勢ひ頗る盛んなり、而も尙ほ蕉風進歩の中途に在り、俳眼未だ高からざるの評を免るゝ能はず、試に同書に於ける芭蕉の句を摘録せん。

いさ行かん雪見にころぶ處まで 芭蕉
 二日にもぬかりはせしな花の春 同
 かれ芝やまたかけろふの一二寸 同
 ほろくくと山吹ちるか瀧のおと 同
 おもしろうてやがて悲しき鶉舟哉 同
 夕顔や秋はいろくの瓢かな 同
 ひよろくと猶露けしや女郎花 同
 きぬた打て我に聞せよ坊がつま 同

冬こもり又よりそはん此はしら 同
 雲雀より上にやすらふ峠かな 同
 然るに其の翌元祿四年、去來、凡兆等の選に係れる『猿蓑』は、最も多くの佳什を網羅し、進境更に一段の高さを覺え、俳壇の盛事、此に極まれりとも評すべし。後世、元祿を語るものをして、必ず先づ指を此の集に屈せしむ、集中に於ける芭蕉の句、及び他の數子の佳作を掲げん。

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也 芭蕉
 住つかぬ旅のころや置炬燵 同
 野を横に馬ひきむけよほととぎす 同
 うき我をさびしがらせよ閑古鳥 同
 夏草や兵どもの夢の跡 同
 笠島やいづこ五月のぬかり道 同

頓て死ぬけしきも見えず蟬の聲

一九八

堅田にて

病雁の夜寒に落て旅ねかな
山吹や宇治の焙爐の匂ふ時
草臥て宿かる頃や藤の花

同 同 同

幾人か時雨かけぬく勢田の橋
道ばたに多賀の鳥居の寒さ哉
炭竈に手負の猪の倒れけり
蜀魂なくや木の間の角櫓
かつくりとぬけ初る齒や秋の風
終夜秋風きくや裏の山

丈 尙 凡 史 杉 會
草 白 兆 邦 風 良

旅枕鹿のつきあふ軒の下
梅が香や山路獵入る犬のまね
うすらひやわづかに咲る芹の花
鶯の雪ふみちとす垣ほかな
かけろふやほろく落る岸の砂

高山に臥て

春雨や山より出る雲の門

猿 雖

芭蕉庵のふるさを訪

菫草小鍋あらひし跡やこれ

曲 水

庚午の歳家を焼て

焼にけりされとも花はちりすまし

北 枝

(以上猿蓑)

更に同集に收むる所の俳諧を掲げて、當時の風調を示さん。

市中は物の匂ひや夏の月 凡 兆
あつしくと門々の聲 芭
二番草取も果さず穂に出て 去
灰うちたたくうるめ一枚
此筋は銀も見しらす不自由さま
たゝとひやうしに長さ脇指
草村に蛙こはかる夕まくれ
露の芽とりに行燈ゆりけす
道心のおこりは花のつぼむ時
能登の七尾の冬は住うき
魚の骨しわふる迄の老を見て

蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來

待人入し小御門の鑑
立かゝり屏風を倒す女子共
湯殿は竹の簀子わひしき
苗香の實を吹落す夕嵐
僧やゝさむく寺にかへるか
さる引の猿と世を経る秋の月
年に一斗の地子はかるなり
五六本生木つけたる漕
足袋ふみよこす黒ほこの道
追たてゝ早き御馬の刀持
てつちか荷ふ水こぼしたり
戸障子もむしろかこひの賣屋敷

蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來

てんしやうまもりいつか色つく
こそくと草鞋を作る月夜さし
蚤をふるひに起しはつ秋
そのまゝにころひ落たる升落
ゆかみて蓋のあはぬ半櫃
草庵に暫く居ては打やふり
命うれしき撰集のさた
さまざまに品かはりたる戀をして
浮世の果はみな小町なり
何故に粥すゝるにも涙くみ
御留守となれば廣き板敷
手のひらに虱這はする花の陰

來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉

かすみうこかぬ晝のねふたさ

來

凡兆十二世蕉十二去來十二

(以上猿蓑)

炭俵集の平淡

次で出でたるは元祿七年の『炭俵』なり、野坡、利牛、孤屋の選に係る、此の集、
之れを『猿蓑』に比する時は、稍や精采を欠くものあり、人或は之れを評して、
『猿蓑』の絢爛、遂によく『炭俵』の平淡に歸し、蕉風の極致は、全く此の集に存
すと云ふものあれども、斯る議論を唱ふるは、概ね世の所謂月並派の人々が、
但しはそれに近き人の言たるを免かれず。『炭俵』の平淡なるは猶ほ可なり、之
れを學んで到らざる時は、月並の俗調に陥るや論なし、我等は敢て芭蕉の伎倆
が、『猿蓑』以後に至て衰へたりとは云はず、然れども漸く其の盛りを過ぎたり
と断言するに於て、決して躊躇するものに非ず、芭蕉の俳歴は、最早此の以往
を語るに及ばざるべし。

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

芭

蕉

| | | |
|--------------------------------|---|---|
| みちのくのけふ關越ん箱の海老 | 杉 | 風 |
| 長松が親の名で來る御慶哉 | 野 | 坡 |
| 鹽魚の裏ほす日也衣かへ | 嵐 | 雪 |
| ほととぎす一二の橋の夜明かな | 其 | 角 |
| 麥跡の田植やあそき螢とき | 許 | 六 |
| 名月や椽とりまはす黍の廬 <small>ワラ</small> | 去 | 來 |
| 蘆の穂や顔撫揚る夢こゝろ | 丈 | 草 |
| 秋風や茄子の數のあらはるゝ | 木 | 白 |
| 刈蕎麥の跡の霜ふむすゝめ哉 | 桐 | 實 |
| 蕎麥切に吸物もなき寒さ哉 | 利 | 牛 |
| 御火燒の盛物とるな村からす | 智 | 月 |

(以上炭俵)

第五章 芭蕉の俳風

俳壇に於ける芭蕉の地位は、單に蕉風を開きて、文學的俳句の濫觴をなしたりと雖も、彼れが其の六感に於て述べたりといふが如く、或る一種の俳句に就ては、門人中往々其の師を凌駕するものなしとも限られざりしが、各種各様の句を通じ、到る處佳ならざるなきは、獨り芭蕉の亭然として衆に摘んずる所なり。左れば芭蕉の俳句を研究せんと欲するものは、先づ歴史的に其の俳風の變遷を見ると共に、又分類に依つて變化の種類を明かにせざるべからず、若しも精密に之れを分類する時は、殆んど際限なき次第なれども、其の概略を示せば、雄壯、幽玄(閑寂をも含む)、溫雅、纖巧、華麗、奇拔、滑稽等の諸體に分ち、別に寫實(叙景叙情を含む)、並に字餘り、漢語調等の句形の變化に屬するものあり、其の變化に富める所、是れ纏て俳聖の名に背かざる所なりと云ふべし。

△雄壯なるもの

二〇六

夏草やつはものどもの夢のあと 同
 五月雨を集めて早し最上川 同
 五月雨の雲吹き落せ大井川 同
 一聲の江に横ふや郭公 同
 六月や峯に雲おくあらし山 同
 あら海や佐渡に横たふ天の川 同
 かけ橋や命をからむ鳶かつら 同
 塚も動け我泣聲は秋の風 同
 秋風や藪も鳥も不破の關 同
 猪も共に吹かるゝ野分かな 同

芭蕉の天稟と修養とを考へてするも、雄壯の句は殆んど此の外に出でず、然れども芭蕉なればこそ能く此の數句をも有するなれ、其角、嵐雪の徒すら、之に匹敵すべきもの一句を得る能はざりき、芭蕉の偉大なる所以は畢竟こゝにあり、是れ素より其の天稟に基くものなるべしと雖も、彼が好んで漢詩を誦し、殊に杜子美を愛讀して、其の風骨に私淑したる等、與つて大に力ありといはずんばあらず。後來谷口蕪村が、天明の俳壇に立て芭蕉に拮抗したるも、亦た彼れに此の種の雄壯の句あるが爲に外ならず。他の諸體は各時代の俳人にして、之を能くするもの概ね少なからず、獨り雄壯の句に至つては、元祿の盛時、僅かに指を芭蕉に屈するのみ、而も蕉門の諸子が、閑寂幽玄を喋々する割合に、此の雄壯の句を閑却するが如きは、我等の解する能はざる所なり。

△幽玄なるもの

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき

芭蕉

二〇七

衰へや齒にくひあてし海苔の砂 同
 ほろくくと山吹ちるか瀧の音 同
 時鳥なくや黒戸の板びさし 同
 清瀧や波にちりこむ青松葉 同
 静かさや岩にしみ入る蟬の聲 同
 菊の香や奈良には古き佛だち 同
 聲すみて北斗にひく礎かな 同
 冬籠り又よりそはん此柱 同

閑寂幽玄は蕉風の本色にして、又其の誇りとする所なれば、蕉門全體の句を通じて、其の調子を帯びたるは極めて多しと雖も、而も真に幽玄閑寂の深味を含むの句は、決して多くを得べからず、就中、殊更に禪臭を帯びたる句を作りて之を幽玄の句と強んとする如きは、徒らに嘔吐を催さしむるものなきを得ず、

真の幽玄は無聲の間にあり、真の閑寂は無臭の間にあり、之を能くするものは芭蕉の外、甚だ多からず。

△温雅なるもの

枯芝やまだ陽炎の一二寸 芭蕉
 春の夜は櫻にあけてしまひけり 同
 傘に押し分け見たる柳かな 同
 古寺の桃に米ふむ男かな 同
 山路来て何やら床しすみれ草 同
 山吹や宇治の焙爐の匂ふ時 同
 清瀧の水くみよせて心太 同
 蔦植て竹四五本の嵐かな 同
 病雁の夜寒に落ちて旅寐かな 同

旅人と我名よばれん初時雨
しぐるゝや田のあら株の黒む程
石山の石にたばしる霞かな
同 同 同
温雅なるものは平俗に流れ易し、温雅にして平俗に流れず、然る後始めて其の妙を見る。

△繊巧なるもの

落ちさまに水こぼしけり花椿
春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏
春雨や二葉にもへる茄子種
よく見れば薺花さく垣根かな
吹くたびに蝶の居直るやなぎ哉
草の葉を落るより飛ぶ螢哉
芭蕉
同 同 同 同 同 同

粽結ふ片手にはさむ額髪
眉掃を俤にして紅の花
白露をこぼさぬ萩のうねりかな
同 同 同
雄壯なるもの、得難きと共に、繊巧なるものには陥り易し、然れども繊巧にして、妙を得たるものは、是亦決して得易からず。

△華麗なるもの

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ
雪間より薄紫の芽獨活かな
四方より花咲き入れて鴉の海
行末は誰が肌ふれん紅の花
酔て寐ん撫子さける石の上
象潟や雨に西施がねふの花
芭蕉
同 同 同 同 同 同

ひよろくと猶露けしや女郎花

同

金屏の松の古びや冬籠り

同

纖弱なるものが、雄壯なる能はざると同じく、幽玄なるものは、多く華麗なり
難し、然るに芭蕉は、多くの華麗なる句を其の集中に遣せり、殊に金屏の句の
如く、人事に互りて華麗なるものは、寧ろ天明の特色にて、元祿に於ては、極
めて稀れに之を見る。

△奇抜なるもの

鶯や餅に糞する椽の先

芭蕉

飲みあけて花いけにせん二升椀

同

雲雀より上に休らふ峠かな

同

野を横に馬引きむけよ郭公

同

蛸壺やはかなき夢を夏の月

同

物書て扇ひきさくわかれかな

同

猪の床にも入るやさりくす

同

霞せよ網代の氷魚をにて出さん

同

生ながら一つに氷る海鼠かな

同

△滑稽なるもの

猫の妻竈の崩れより通ひけり

芭蕉

麥飯にやつるゝ戀か猫の妻

同

△斬新なるもの

芭摘んで貧なる女機による

芭蕉

梅若菜鞠子の宿のとり汁

同

奈良七重七堂伽藍八重櫻

同

隠れ家や月と菊とに田三反

同

送られつ送りつはては木曾の秋
 蛤のふた見に分れ行く秋ぞ
 かくれけり師走の海のかいつぶり
 同
 菖蒲生り軒の罽の罽體
 同
 團扇もてあふがん人の背中つさ
 同
 夜着一つ祈り出だして旅寐かな
 同

奇抜なるもの、斬新なるものには、群を抜くの句少なからず、滑稽なるものも、また人を笑はしめざるに非すと雖も、其の句數も極めて少なく、其伎倆も餘りに優れたりと云ふを得ず、他人にあつては大に賞すべきものも、芭蕉にあつては、僅かに此の一體の風格を示したりと云ふに止まるべきか。

△寫實せるもの(叙景叙情とも)

五月雨や色紙へぎたる壁の跡
 芭蕉

さゝれ蟹足遣ひ上る清水かな
 同
 ひいと鳴く尻聲悲し夜の鹿
 同
 鞍壺に小坊主のるや大根引
 同
 鹽鯛の齒莖も寒し魚の棚
 同
 旅に病で夢は枯野をかけ廻る
 同
 寒けれど二人旅寐ぞたのもしき
 同
 すぐみ行く馬上に氷る影法師
 同
 住みつかぬ旅の心や置炬燵
 同
 いかめしき音や霞の檜木笠
 同

彼れが寫實の句には、旅行に依つて得たるもの甚だ多し、是等の句は必ずしも名句にあらず、然れども其の實景實情を、有りのまゝに寫したる所には、また一種の活きたる味ひあるを知らざるべからず。其他字餘り又は漢語調の如き、

新調を帯びたる俳句も少なからざれども、是れ概ね『虚栗集』前後のものにて、當時の事を叙する所に、既に詳かに之れを掲げたれば、重複を恐れて、態と略したり、乞ふ其の條下を参照せよ。

第六章 蕉門の俳論

次に研究すべきは、蕉門の俳論なり。由來作家は餘りに評論を好まず、又芭蕉の當時に在ては、精密に文學を評論するの術をも知らざりしが故に、其の俳句の天下獨歩たりしに似ず、俳論は概して、物足らぬ心地するを免かれざれども左りとて其の意見の存する所を窺ふに足るものなきに非らず。芭蕉會て曲水に書を與へて、風雅の道に三等の別あるを説く。

風雅の道筋、大方世上三等に相見候。點取に晝夜を盡し、勝負を争ひ道を見ずして走り廻る者あり。彼等は風雅のうろたへものに似候へとも、點者の妻

子をはごくみ、店主の腹をふくらし候へは、假事せんにはまさりたるべし。又其身富貴にして、目に立慰みは世上をはごかり、人事いはんよりはと、日夜に二卷三卷點取、勝たるもほこらず、負たる者も強めて怒らず、いさ又一卷なと、取かゝり、線香五分の間に工夫をめくらし、終に即點なとと興すること、偏に少年のよみかるたに等し。されとも料理をととのへ、酒を飽ませてにして、貧なるを助け、黠者を肥しむること、是又道の建立の一筋なるへきか。又志を勉め、情を慰め、あなかに他の是非をとらず、これより誠の道にも入ぬへき器なりなと、遙かに定家の骨をさくり、西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るへき族、都鄙をかそへて、十の指をふさす君も即ち十の指たるべし。能々御愼御修行專一に存候。

書中に謂ふ所の、「西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入る」とは、是れ芭蕉が前人に私淑せる徑路を語りたるものともいふべきか、彼れの閑寂幽

玄なる俳想は、是等の人々に依て導かれたりとするも、彼れは徒らに古人の糟粕を嘗めて、之に安んずるものにあらず、彼れは實に自然を師とし、天地と同化して、爰に初めて、彼の思想を練り、彼の俳諧を作れり。若夫れ蕉風の俳諧とは、如何なるものなるかを知らんと欲せば、支考曰く、

我朝の俳諧は宗鑑を慕ひ、守武を學びて、俳諧の詞はひろまりたれども、俳諧の心を傳へたる人なし、此故に我翁は、俳諧に故人なしと云へり、昔の俳諧に道をわきまへず、今の俳諧に道を得たりといはん、俳諧といふに三つ有るべし、花月の風流は風雅の躰なり、可笑しきは俳諧の名なり、淋しきは風雅の實なり。

語て未だ詳かならずと雖も、以て俳風の如何なるものたるやを知るべし。畢竟、眞の俳諧は、言語を弄するに非ず、着想の上に重きを置くべき事を示し、然も其の着想は、「淋しさ」を以て「風雅の實」とし、閑寂幽玄の外に、また俳諧なし

と爲せるなり、左れば『笈の小文』に序して曰く、

造化に従ひて四時を友とす、見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし、偶、花にあらざる時は夷狄にひとし、心、花にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出で、鳥獸をはなれて造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

『一串抄』に曰く、

うき我をさびしからせよ閑古鳥

翁がうきとする處は、世の交りなり、樂とする處は幽閑にて、即ち今云へるさびしみなり、故に作意のある處、集中三四分は閑情より觀相に入る、觀相乃ち幽玄體にて、是れ翁が性質のひく處、終に一字をなす基也。

餘りに閑寂幽玄を愛するものは、遂に人事を忘る、人事を外にしては、複雑の想あるなし、自然詩人としての芭蕉は、實に空前の大成功をなせり、然れども

之と同時に、彼れの俳想が、人事に於ては、尙ほ未だ到徹せざるを知らざるべからず。

芭蕉の俳想到ては、既に略ぼ説明したり、次に述べべきは俳句の心得なり。芭蕉曰く、

芭蕉作句の心得

句は七八分にいつめてはけやけし、五六分の句はいつまでも聞きあかず。是れ露骨淺薄なるを厭ひ、主として餘韻の多からんを望めるもの。更に曰く、句作に、なるとするとあり。内を常に勉て物に應ずれば、其の心の色句となる。内を常につとめざるものは、ならざる故に私意にかけてするとぞ。

是れ平生の修養に重きを置き、句作の場に臨んで、強て作爲製造を事とするの不可なるをいひたるものなり。芭蕉は更に一步を進めて不易流行の事を説いて曰く、

萬代不易あり、一時の變化あり、此二個究る其本一なり。其一といふは風雅

不易流行

の誠なり。不易を知らざれば實に知るにあらず、不易といふは、新古によらず變化流行にも拘はらず、まことによく立たる姿なり。(中略)又千變萬化するものは自然の理なり。變化はうつらざれば風改まらず、是に押うつらすと云は、一端流行に口質時を得たるばかりにて、其誠をせめざる故なり。せめず心をこらさざるもの誠の變化を知ることなし。

去來曰く、

不易は無爲の時、流行は座臥行に屈伸伏仰の形同じからざるが如し、一時々々の變風是也、其姿は時に異なると雖も、無爲も有爲も本は同じなり……先師はじめて俳諧の本躰を見つけ、不易の句を立、また風は時々變あることを知り、流行の句變あるとを分ち教へ給ふ。

又曰く、

句案するものは先づ趣向をあんず、趣向やうく至りて句作りを思ふ、句來

らんとする時、或は新古の風の出来る、その古風なるものは幾度も掃ひすて、たゞ新風にかなはんとす、新風やうくいたりて句定まる、しかれば流行を思ふ事は、趣向の後、句の前といはんか、是れ平生の案姿なり、また不易は一たび心に得て變ずる事なし、故に流行の如く切に思ひ切に捨てず、…不易流行をわかちて、案ずるを故ありと云ふべしとは、或は奉納、賀、追悼、賢人、義士のたぐひの贊の如きは、必らず不易を以て句案するを要とす、又着題風俗あるひは他門の人に對して當流をほのめかし、或は新風にもしうつらんと稽古の如き、皆な流行の句をもて専らに案す。其角も亦た曰く、

俳諧新古の境

俳諧に新古の境、分けがたし、いはゞ情の薄き句は、自から見あきもし、聞ふるさるゝにや、又情の厚き句は、詞も心も古けれど、作者の誠より思ひ合せぬる故に、時にあたらしく不易の功あらはれ侍る。

不易流行の意味は、是にて略ほ諒解せらるべし、要するに不易を先に立て、穩健なる着想を失はず、而も尙ほ其の時々に變化する流行の事をも忘るべからずと云ふにあるべし。

寂樂

次は、蕉門に所謂、寂、榮、細みあり。去來は曰く、強て之を言はゞ、寂は句の色にあり、榮は句の餘勢にあり、然れども趣向も詞器共に撰ますんばある可らず。又曰く、榮は句の姿なり。細みは句意にあり。

と、其一例として、左の三句を挙げたり。

- (寂) 花守や白きかしらをつきあはせ 去來
- (榮) 十圍子も小粒になりぬ秋の風 許六
- (細み) 鳥どもは寐入て居るか余吾の湖 路通

寂とは、云ふ迄もなく、其の詩材を閑寂幽玄の所より取るとにて、榮とは言詞

の調子、語路風格の整頓を意味し、細みとは其の句全體の引締りて、何となく餘韻の物あはれに感せられしものあるを云へるなるべし。

又俳諧の上に就て、芭蕉は高山某に左の書を興へて、其の陳腐を嘆き、且つ俳諧新古の區別を唱へたり。

其上大坂江戸共に俳諧殊の外古くなり候て、皆同じ事のみになり候。折りふし所々思入替候を、宗匠と申者も、未だ三四年以前の俳諧になづみ、大かた古めきたる様に御座候。云々。

- 一、一句前句に全體はまること、古風中興とも可申候
- 一、俗語の遣ひやう、風流なくて又古風にまきれ候事
- 一、一句細工に仕立候事不用の事
- 一、古人の名を取出て、何々の白雲と言捨たること、第一古風にて候事
- 一、文字あまり三四字、五七字あまりにても、句のひびき能く候へば一字

俳諧新古の區別

にても、口にたまり候を御吟味可有候事。

是れ恐らく天和の頃の手束なるべく、また以て明かに芭蕉の理想を窺ふを得べきものあり、而して彼は更に明確に説て曰く、

發句は昔より様々變はり侍れども、附句は三變なり。昔は付物を専とす、中比は心付を専とす、今はうつりひびき句位を以て付るをよしとす。附句は大木倒すが如し、錨もとに切りこむべし。西瓜きるが如し、梨食ふ口つきの如し、付心は薄月夜に梅の匂へる心こそめでたけれ。

蕉風俳諧の特徴は、此附方に在り。うつりひびき句位、これ蕉風の極意なり前句の物體を取て、其れに縁ある物體若しくは事件を以て之れに附く、是れ付物即物附となす。前句の意を取つて、それ縁ある事件を付く、これ心付なり芭蕉は物付、心付の付き過ぐる事、即ち露骨に過ぐる事を排列し、附くか附かぬの間にありて、しかも餘韻の煽々たるを善しとなせり。然れども芭蕉も亦た

必ずしも物附を排斥したるにあらず。芭蕉曰く、

附物にて付ること、當時好まずと雖も、附物にて付けたからんを、さつぱりと付たらんは、又手柄となるべし云々。

嵐雪は更に附句の變化を述べて曰く、

附句の變化は大むね料理の甘く淡く酸く辛きが如し。能もよからず、あしきもあしからず、時によるしきを變化といふなり。云々。

去來は曰く、

蕉門の付句は前句の情を引來るを嫌ふ。たゞ前句はいかなる場、是いかなる人と、その業その位をよく見定め、前句をつきはなして付べし。

又曰く、

附句は一句取り放して、さして見る所なき様なる句も、前句によりて、大なる手柄あり。

附句の變化は、略ぼ以上の所説にて知るく、更に一卷全體の變化、及び首尾の變化に就て、芭蕉は曰く、

一卷表より名残まで一體ならんは見くるし。

支考は曰く、

名家の一卷を見て、始終の變化をかへり見ず、此句はおかしからず、其句は味なしなどいふべけれど、一卷をつらぬる事、あながちに一句の上を論せず蕉風の旗幟は、此の如くにして鮮明に高く掲げらるゝと共に、芭蕉は全國に行脚して、其の俳風を傳播したり、芭蕉は絶世の詞豪たりしと同時に、また絶世の才人たり、而して天賦の品性、甚だ温順、平和なりき、左れば其の多くの門人は、芭蕉の詞藻を慕ふとゞもに、其の性質を愛慕し、苟も言、芭蕉の口より出づるものは、皆之を服膺し、事、芭蕉の行に係るものは、皆之を想望せざるはなかりしなり。然るに一旦芭蕉の遷化するや、門人中、或は俳壇の大權を占

有せんとし、或は言を芭蕉に寄せ、偏狹なる俳論を唱へて天下を欺かんとし、芭蕉に依て統一せられたる俳諧は、遂に再び亂麻の有様を呈するに至れり。

第七章 蕉門の諸俳士

蕉門十哲の名は、何人の附けたるものなるやを知らざれども、其の人選中に、凡兆の如き名手を脱して、評六、支考の如きもの、加はるを見れば、恐らく芭蕉の言に出でず、評六、支考、或は後人の附托に出でたるものならんが、兎に角一般の稱呼に隨ひ、先づ其の所謂十哲を始め、更に他の名士の略傳を掲げ、並に其の俳風の一端を示さん。

(一) 寶井其角

寶井其角と、服部嵐雪とは、芭蕉が兩の手の桃と櫻として愛したる高弟なり、其角、幼名は源介、寛文元年江戸堀江町に生る。本姓は寶井、其の榎本と云へるは、一時母方の姓を冒したるに因る。父の名は東順、醫を業とし、傍ら俳諧

を弄ぶ、其角それを見て、亦俳諧を好くせしが、芭蕉の江戸に下りし時、之れに従て俳諧を學び、後江戸座を開きて、蕉風の俳諧を弘む。老鼠肝湖十、松木淡々、秋色、桑岡貞佐、鶴海一漁、早野巴人(後嵐雪門)、常盤潭北等の門人を従へ、豪宕磊落を以て、東都の俳壇に鳴れり。

其角、儒を寛齋に學び、醫を草刈某に學び、詩を大嶺和尚に學ぶ。書は縦横跌宕、霸氣筆に溢る、芭蕉の高古に及ばずと雖も、また一代の達筆なり、初め佐玄龍に従ひ、中ごろ米元章を學び、後ち日蓮を摸したりと云ふ、眞跡の傳はるもの極て稀れなり、板本には自筆の『五元集』あり。又書を英一蝶に學ぶ。其の晋其角と稱せるは、易に「晋其角」とあるに基き、寶晉齋の號は、其の得たる硯に米元章の自書して、鐫せしめたる此三字あるに基きたるものなり。寶永四年二月二十三日「鶯の曉寒しきりくす」の一句を口吟して病に臥し、七日を過ぎて、同月晦日四十七歳にして没す。江戸芝二本榎上行寺に葬る、法號を喜寛

居士と云ふ。

二三〇

其角は、性豪放にして、頗る才氣あり、學識また決して淺からず、されば時として豪放の眞面目を現はし、時として其の才氣を弄し、又時としては其の學識に基づく等、作句の力に於て、亦た實に驚くべき手腕を有したり。芭蕉が彼を定家に比し、「左までもなき事を、仰々しく聞えさす」と云ひしは、確かに彼れの伎倆の他に秀でたるを稱するものにて、彼れの腦は、他人の難題難趣向とするものをも忽ちにして能く消化し、彼れの口は巧に之を俳化して吐出せり。然れども其の長所は、聽て短所となり、奇巧に失し、卑俗に失し、露骨に失するの弊も、また其の豪放と才氣とに因るものなしとせず。芭蕉嘗て其角を評して、「其角は同席に連なるに一座の興に入る句を言ひ出で、人をいつも感ぜしむるが、余は其のことなし」と云ひ又嘗て、

聲かれて猿の齒白し峰の月 其角

其角の性格

の句を見て、「汝が病起りたり、珍らしきとをいはんとて、遠く求めてけやけし句は唯だ足下にある」と戒めたるが如き、其角は速吟にして、而も才氣の縦横に迸るあり、古今の俳壇を通じての一英傑たる事、素より論ずる迄もなしと雖も、彼れは芭蕉の田舎者なるに似ず、江戸ツ子なるが故に、所謂江戸趣味と見るべき、細みと輕みとは、彼れの俳句の上に、自から一種の特色を發揮し、此の點に於ては、芭蕉も及ばざる所あるを免れざりしが、斯の如き趣味は、深遠含蓄の想と一致する能はず、又彼れが常に有する市井の氣は、彼れをして往々俗人たらしむ、然も彼れは好んで俗人たるを甘んじたり、是れ彼れと芭蕉との性格の大に異なる所にして、芭蕉は俳句の爲に俳句を作り、其角は渡世の爲に俳句を作りたるの傾きあり、左れば芭蕉は、一たび富豪三井秋風の門を訪づれしも二たび敢て足を此に運ばざりに反し、其角は露沾、風虎等の權門、紀國屋文左衛門等の金穴、其の他權門富豪の彼れを招くあらば、進んで之れと交り

二三一

を結ぶ。併しながら彼れは之れと同時に、八公、熊公の招聘を辭せず、又自から進んで彼等の手を握りて俳諧を談じたり。其角は實に蕉門の柳下惠とも稱すべきものならん、彼れの江戸座は、全く彼れの此の江戸趣味の發揮に基き、彼れか後來洒落風（洒落風の事は、芭蕉没後の俳壇に於て、之れを述べん）の一派を開きて、俳諧の墮落を促したる如きも、また之れか爲に外ならず、要するに其角が俗流を厭はずして、之れに出入したるは、一方に彼れの品格を傷けたる事なしとせざるも、一方に彼れをして偉大なるものたらしめたり。彼れが俳人として、蕉門の第一位を占むるも、全く此の點にあり、彼れの才氣と伎倆とは遂に凡骨の及ぶ所にあらず。彼れの俳風を知らんとせば、『五元集』、『續五元集』、『類柑子』、『新二百韻』、『蕉尾吟』等を讀むべし。

鶯の身を逆に初音かな 其角
白魚をふるひよせたる四ツ手かな 同

薄氷やはつかに咲ける芹の花 同
美しき顔かく雉の距かな 同
饅頭で人を尋ねよ山櫻 同
時鳥あかつき傘を買はせけり 同
籬まけ雨に提げくる杜若 同
夕涼よくぞ男にうまれける 同
文七にふまるな庭の蝸牛 同
貫之の鮎の鮮食ふ別れかな 同
名月や疊の上に松の影 同
十五から酒をのみ出てけふの月 同
小屋涼し花火の筒のわるゝ音 同
雨蛙芭蕉に乗て戦ぎけり 同

雁の腹見送る空や舟の上 同
 家こぼつ木立も空し後の月 同
 杉の上に馬を見えくる村紅葉 同
 横雲やはなれくの蕎麥島 同
 凧や沖より寒き山のきれ 同
 からびたる三井の仁王や冬木立 同
 初雪に此の小便は何やつぞ 同
 千鳥たつ加茂川越て鉢叩 同
 やりくれて又や狹筵年のくれ 同
 鼻を掃く孔雀の玉や冬籠 同

(二) 服部嵐雪

服部嵐雪は、承應三甲午年、淡路國三原郡小椋並村の農家に生る、幼名久米之丞(或は云ふ孫之丞)、又治助と稱し、後に彦兵衛と改む。丁年に至る頃、江戸に來り、新莊隱岐守に仕へ、後故ありて井上相模守に仕ふ、當時相模守財政整はず、争諫三度に及ぶも、遂に用ひられず、是に退隱の念を起し、武器は固より、雜具一切を棄て、飄然として去つて身を風雲にまかせ、芭蕉の門に入りて俳諧を學び、又濟雲方丈に參して禪を學ぶ。「雪埋千山什麼孤峯不白」なるの語によりて、雪中菴嵐雪と號し、別に寒蓼堂、黃落堂、不自軒、石中堂、玄峰堂、蓼太郎、佛山大居等の名あり、又書を多賀信香(後に英一蝶)に學び名を良香と稱す。

俳諧は雪門を開きて雪中庵の祖となり。櫻井吏登、清水周竹、大塲寥和、高野百里、三田白峰等の諸門弟を輩出せしめ、其角と相對して東都の俳壇に噴々の

名聲を揚げたり。其角は才子にして放縱、時に暫間的の行爲ありと雖、嵐雪は老實にして温順、夙に精巧を以て鳴る。故に其角の句は奇抜にして強みあり、嵐雪の句は温雅にして練熟す。唯だ彼れに最も惜むべきは活動の勢力を欠くの一事なり、是れ其角が餘りに活動して、其の勢力を遺憾なく擴張するに反し、彼れは寧ろ消極の態度に依りて、其の地歩を占むるの外なかりしに依るやも知らずと雖も、芭蕉が左右の高弟としては、如何にも平凡に過ぎたる嫌ひなしとなさず、左れど彼れが師翁の教訓を忠實に守りて、敢て新意を出さず、蕉門の主張とせる寂菴の俳脈を、其の儘に傳へたるは、多とするに足るもの無んばあらず、芭蕉は彼れの句を評して、「からびたる事嵐雪に及ばず」と云へり、適評なるべしと雖も、彼れはまた國文を好みたるものと見え、作句中に、その語調を帯ひたるもの少なからず、彼れの句は理想に乏しくして、實景實情を叙するに巧みなり、『玄峯集』、『若水』等は、彼れの俳風を窺ふに適切の書なり。寶永

寂菴の俳脈
承者

嵐雪没す

四年亥年十月十三日病て卒す、年五十四、江戸駒込竹町(現白山前町)日蓮宗常
 檢寺に葬る、雪中菴不自玄峯居士といふ。

| | |
|-----------------|---|
| 梅一りん一りんほとのおたゝかさ | 嵐 |
| ぬれ椽に薺こぼるゝ土ながら | 同 |
| 蒔あけて莖立買はん朝まだき | 同 |
| 籠に入て美人に馴るゝ燕かな | 同 |
| 花に風軽く來て吹け酒の泡 | 同 |
| うます女の雛冊つくそ哀なる | 同 |
| したり尾の長尾くゝに菖蒲哉 | 同 |
| 文もなく口上もなし粽五把 | 同 |
| 顔につく飯粒蠅に興へけり | 同 |
| 真夜半やふりかはりたる天の川 | 同 |

立出てうしろ歩や秋のくれ 同
 秋かせの心動きぬ細すたれ 同
 名月や烟這ゆく水の上 同
 黄菊白菊其外の名はなくもがな 同
 隠れ家やよめ菜の中に交る菊 同
 はせ釣や水村山廓酒旗の風 同
 琴は語る菊はうなづく籬哉 同
 ふとん着て寝たる姿や東山 同
 武士の足で米とぐ霰かな 同
 雪の門臼と盥の姿かな 同
 古足袋の四十に足を踏込ぬ 同
 蕎麥うちて鬢髭白し年のくれ 同

(三) 向井去來

去來の恭謙篤實

向井去來は、肥前長崎の人、名は平次郎、兄に隨て京都にあり、嵯峨に庵室を結で落柿舎と號す。去來人と爲り恭謙篤實、其の芭蕉に事ふると君父も曾ならず、常に親愛と尊敵とを失はざりしかば、芭蕉も亦之を見ると宛も吾愛兒の如くなりしと云ふ、去來曾て芭蕉と共に正秀亭に會す。其の座の俳諧に去來第三を付けたるに、其の句宜しからずとて、芭蕉は之れを添削したるが、會はて、後芭蕉は去來を叱りて「斯くのびやかなる第三を付くると、前句の景色を探らず未練の事なり、此の度の耻は是非一度雪がんと心がくべし」とて夜もすがら怒りたりとの話あり。去來は此の如き人なれば、其の作る所の句も敦厚にして、輕浮ならず、平穩直樸の間に特色を發揮せり、其の意匠は幽遠に馳せずと雖も、其の格調極めて自然にして、斧鑿の痕を留めざるは餘子の到底及ぶ所にあらざるべし。去來は、斯く恭謙篤實の士なりと雖も、また頗る武事を好み、殊に弓術に妙を

得たりと云へば、彼れが尋常一様の腰拔俳諧師にあらざる事を察すべし。芭蕉が彼を愛したるも、或は此の邊の性行に喜ぶ所ありしに依るべきか。當時江戸には其角、嵐雪を始めて、蕉門の諸豪、多士濟々たるに拘はらず、西國の俳豪とだに云はゞ、先づ指を去來に屈せざるを得ざるものあり、芭蕉が彼れを以て西三十三ヶ國の俳諧奉行に擬したるも所以なきに非らず、殊に芭蕉が、蕉門一代の盛時を記念すべき、彼の『猿蓑』の選を、彼れと凡兆とに托したるが如き、以て其の信任の如何を知るに足り、彼れまた遺憾なく其の委托を全ふしたるは共に喜ぶべき事と云ふべし。

彼れに「落柿舎記」あり、自から之れを作る、其の文に曰く、

雙蛾に一つの古家侍べる、そのほとりに柿の木四五本あり。五とせ三とせ經ぬれど、このみも持來らず、代かゆるわざもきかねば、もし雨風に落されなば玉祥が志にも恥ぢよ。もし鶯鳥にもとられなば天の帝のめくみにもいねむと、屋敷もる人を常はいとみの、しりけり。ことし葉月の末かしこにい

西三十三ヶ國
俳諧奉行

去來の落柿舎

たりぬ。折ふし都より商人の來り、立木にかいもとめむと、一貫文さし出し悦びかへりぬ。予はなほそこにとゞまりけるに、ころ／＼と屋根はしる音、ひし／＼と庭につふる聲、夜すがら落もやまず明れば商人見舞來り、梢つく／＼と打詠め、我むかふ髪の頃より、白髮生まるまで此事を業とし侍れど、かくばかり落ぬる柿を見ず。きのふの價かへしくれたびてむやと詫ぶ。いと便なければかへしやりの、この者のかへりに友ぢちのもとへ消息送るとて、みづから落柿舎の去來と書きはじめたり。

柿ぬしや梢はちかきあらし山

彼れが落柿舎の由來は、是にて略ぼ諒解するを得んが、彼れにはまた「落柿舎制札」なるものあり、記して曰く、

俳諧奉行 向 去 來

- 一、我家の俳諧に遊ぶべし、世の理窟をいふべからず
- 一、雜魚寢には心得あるべし、大肝をかへからず
- 一、朝夕かたく精進を思ふべし、魚鳥を忌むにはあらず
- 一、速に灰吹をすつべし、煙草を嫌ふにはあらず

一、隣の居膳を待べし、火の用心にはあらず

右條々

其の言ふ所は、蕉門の徒として、當然の事なれども、初めに「俳諧奉行」向去來」と記したるは、如何にも山師的にて、恭謙なる去來の爲すべき事とも思はれずとの議論、稍や喧し、成る程尤もなる説にて、苟も元祿屈指の大家とも云はるゝものが、斯く小供らしき事を書くべしとは、鳥渡想像の出来ざる如くなれども、若しも仔細に之れを論せば、芭蕉が俳諧奉行の名を附けたるよりして既に一種の滑稽に過ぎず、滑稽は當時の流行にて、謹厚の人も、時に之を云ふを辭せざりしとせば、去來が「俳諧奉行」と書きたりとして、強ち深く尤むる程の事にもあらざるべきかと思はる。

彼は『猿蓑』の外に越の浪化に替つて、『有磯砥波』を選し、崎の卯七を助けて、『渡鳥』を集む、此世を去りしは寶永元年九月十日にして、行年五十三なり。

去來没す

上り帆の淡路はなれぬ沙干哉 去 來
一むしろ散るや日蔭の赤椿 同
何事ぞ花見る人の長刀 同
卯の花の絶間叩かむ闇の門 同
湖の水まさりけり五月雨 同
時鳥鳴くや雲雀の十文字 同
涼しさよ白雨ながら入日影 同
手の上になしなく消る螢哉 同
月今宵我里人の薬うたむ 同
秋風や白木の弓に弦はらん 同
鳴鳴くや弓矢をすて、十餘年 同
應々といへどたゝくや雪の門 同

(四) 内藤丈草

内藤丈草は尾張犬山の藩士、二十五歳の秋、自から指を切り、武門を辭し、繼母が生む所の弟に家を譲り、熊野山先聖寺なる玉堂和尚に參禪す。蕉門に入りて俳諧を學びたるは、其の後の事なり。斯る氣立の男子なれば、芭蕉も痛く之を愛し、丈草また深く之に感じ、芭蕉の没後は、義仲寺のほとりに草廬を結んで一生を終れり。彼の俳句は禪味に富み、平淡にして清雅なるを特色とすれども禪味の暴露に失して、稍や厭ふべきものなきにあらず。寶永元年十二月四十二歳にして此世を去る、彼れは決して苦んで句を學ばず、感ありて吟じ、人ありて語す、常は其の事を打忘れたるが如くなりしと云へり。

丈草没す

鶯や茶の木畑の朝月夜 丈草
我事と泥鰻のにげる根芹かな 同
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴 同

取りつかぬ力で浮ぶ蛙かな 同
時鳥啼くや湖水のさゝ濁り 同
つゝ立て帆になる袖や涼み舟 同
はね釣瓶蛇の行方や杜若 同
黒みけり沖の時雨の行どころ 同
水底の岩に落つく木の葉かな 同
居風呂の下や案山子の身の終 同
屋根葺の海をふり向く時雨かな 同
交は紙衣のきれを譲りけり 同
着て立てば夜の衾もなかりけり 同

(五) 杉山杉風

江戸に於て、芭蕉が最初に草鞋の紐を解きたるは、小澤卜尺の家と云ふとなれ

東三十三ヶ國
俳諧奉行

ども、杉風もまた、芭蕉が着京早々、親切に世話したる一人にて、爾來引續いて、東道の主人たり。彼れの深川の別業が、即ち芭蕉庵たり、又其の再建の時の如きも、彼れは家富めるがまゝに、大に力を盡したるも明らかなり。彼は魚問屋を業とし、隨て鯉屋の稱を以て知らる、俳諧に遊ぶ事六十年と稱せられ單に芭蕉の舊門下と云ふに止まらず、又能く俳諧を知り、芭蕉をして、去來を西三十三ヶ國の俳諧奉行とするに對し、彼れを東三十三ヶ國の俳諧奉行に擬せしめたるも、畢竟彼が蕉風の新興に、與つて力ありしによらずんばあらず。『蕉門頭陀袋』に曰く、

杉風は蕉門の子貢なり、よく仕へて敬ひ、翁の訃音を聞くとひとしく、我が職の魚鳥を賣捨、門を閉、籬を築を築し、中陰おごそかに勤め、長慶寺に發句塚いとなみ云々。

以て其の人と爲りの溫藉恭謙なるを察すべし、然も彼れは、芭蕉の没後、支考

杉風、支考を
怒る

が詐術を弄して世を欺き、漫りに自己の勢力を擴張せんとするを見るや、憤怒に耐へず、直ちに絶交狀を認め、

彼れは芭蕉の名を賣りて、風雅を錢にする淺間しの坊や、彼れ若し此後ちに
もあれ、東武に脚を入るゝ事あらば、兩足を切り拂ひくれんずものを。

恭謙なるものは眞面目なり、平素芭蕉の知遇に感激せる彼れが、支考の其の傍若無人の舉動を見て、嚇然として立ちしも、其の筈の事なり。

然れども耳聾にして、且つ性質餘り聰敏ならざりしか、其角の如きすら彼れを侮りしと見え、嘗て芭蕉に向つて、彼れは耳聾したれば、三年の流行に後れたりと云ひしに、芭蕉は殊の外不機嫌にて、彼れは談林より我が門に入りて以來作者として正しきこと、此の上もなき重寶なりと答へたりとの話あり、但し彼れの句評に就ては、寧ろ其角の言を當れりとすべく、不易流行の沙汰は暫らく置き、文學的俳句として價值あるものは多く見當らざるが如し。享保十八年行

杉風没す

年八十餘歳にして没す。

ふり上る 鍬の光や春の野ら 杉 風
 がつくりと抜けそむる 齒や秋の風 同
 川添の 島をありく 月夜かな 同
 時雨つゝ 雲にわたれる 入日哉 同
 年の暮 破れ袴の 幾くたり 同

(六) 森川許六

森川許六は、江州彦根の藩士、一名は百仲、字は羽官、また菊阿佛と云ひ、居を五老井と號す。文事に長じ、又書を能す。芭蕉に従ひて俳諧を學び、芭蕉は書を許六に學びたりと稱せらる。彼れは芭蕉晩年の弟子にして、其の入門は元祿五年なれば、彼れが芭蕉に親炙せるの日は素より長からず。然るに彼の倨傲不遜にして、虚勢を貪るの甚しき、翁の風骨を得たるものは己れ一人の如くに

許六倨傲不遜

振舞ひ、同じ虚勢家の隊長たる東花坊支考と相拮抗して、論難詰責を事とし、

盛に自己廣告に力めたるが、多くは無益の辯論に過ぎずして、俳壇に益する所は極めて稀なるのみならず、其の作句は、概して取るに足るものなし。然れども芭蕉の没後彼れがその芭蕉遺愛の櫻樹を伐りて、肖像を刻み、是を大津なる智月尼に贈りたる如き、また一片の優しみなきに非ず。晩年癩瘡を病みて、一切人に面せず、適々道を問んとて来るものあれば、屏風を隔て、之に語りしが、或る時金澤の生駒萬子來り訪づれ、強て之に面せん事を求むるより、病床に迎へて酒を飲む、唇かけ落ちて臭氣芬々たり、萬子ちかく寄て、杯を酌み交はし、毫も其の悪疾たるを知らざるものゝ如くなりしと云ふ、正徳五年八月二十六日行年六十にして此の世を去る。

許六芭蕉の像を刻む

許六没す

清水の上から出たり 春の月 許 六
 蠟燭に静まりかへる 牡丹かな 同

熊谷の堤あがればけしの花 同
 涼風や青田の上の雲の影 同
 新葉の屋根の雫や初時雨 同
 きりくす鳴や夜寒の芋俵 同
 落雁の聲のかさなる夜寒かな 同

(七) 各務支考

各務支考、東花坊と號す、美濃の北方に生る、初め小野村黄雲山大智寺の禪僧たり、鎮藏主と稱せしが、機鋒銳利にして、同輩の妬みを買ひ、十九歳の時還俗し、元祿三年、芭蕉江州に在りて、湖東の風景に親しむ頃、入つて弟子となる。人と爲り磊落にして敢て法度に拘はらず、芭蕉世に在る間は、吟詠稍や妙境に到りたるも、師翁の没後は、自ら門戸を構へ、學識に誇り、多才を頼み、妄りに芭蕉の遺教と稱して、數十卷の俳書を著し、甚だしきは、自著の書籍に

自ら解釋と批評とを加へて刊行し、又自から跡を故園に晦まし、死する真似して、世の評判を窺ふに至れり。其の性行此の如くなれば、隨て其句多くは輕佻浮薄に流れて、往々蕉風の外に出づるものあり、美濃風の一派を起し、今日に至るまで多少の勢力を有し居れり。彼は論客にして作者にあらず、彼れの集より名句を得んとは素より難し、左ればとて、彼れの論より俳諧の道を聞かん事もなか／＼容易ならず。

蕪村の高弟春泥舎召波は、彼れを評して俳魔支考と云へり、彼れは一面に於て實に俳魔の名を免かるゝ能はざるものあり。然れども俳壇の風雲を叱咤して、一代の雄を其の社會に争はんとする、彼の根氣と其の意地張りとは、又以て蕉門の珍となさざるを得ず、但し其の根氣と意地張りとを徒らに權謀術數に費したるは、頗る惜しむべき事なり。惟然が『花屋日記』十一月の部に、

支考は師の發句を滅後に一集せん心願あれど、此頃の病苦に惱みたまふに見

支考叱らる

合せ居たりしが、今日機嫌よきに乗じて申出侍たらんと去來に申たりければ
去來はかねて師の心中を知りたりし故大に怒り、小さかしき事を申さるゝも
のかな、師は平生名聞らしき事好みたまはず、今日漸く快よき體を見侍りて
諸人嬉しと思ふ中に、師に逆ふ事を聞せ申しては、御心を勞し申す事奇怪な
り此後は御病床近く寄りあるな、早く此座を立去すやと聲あらゝかに次の間
に追立てけり、支考もはからずものいひ出して、大に面目を失ひしが、獨り
惟然に向ひ、我に句あり、そこ書きたまへと云ひて、

しかられて次の間へたつ寒さかな

流石支考なりけりと、蕉翁もほのかに聞きたまひておかしがり給ひけり。

蕉門に於ける去來と支考との地位を見るべく、又支考が人と爲りの一斑を知る
を得べし。斯る心事を以て、芭蕉の没後、彼れは「師翁俳道の血脉流派の斷絶
は眼前にあり」と絶叫して、例の放言高論を始めたるにて、彼れの三義と稱

するものを見るに、所謂俳諧道、俳諧要、俳諧式の如き、陣立こそ仰々しけれ
内容は左まで尊とふべきものにあらず、畢竟衆愚を瞞着せんとする、一個の假
面たるに過ぎざるの感なき能はず、但し彼れが多く著作（蕉門著作書目に詳
なり）中には、讀んで當時の俳情を知るべきもの無きに非らず、唯だ讀者の擇
選如何に存するのみ。享保十六年二月七日没す、行年六十七。

支考没す

これ迄かゝるとて春の雪 支考

船頭の耳の遠さよ桃の花 同

苗代を見て居る森の鳥かな 同

春雨や枕くづるゝ謠ひ本 同

粽結ふ笠に行燈や薄月夜 同

逆の葉に小便すれば御舍利哉 同

摺小木で蠅を追けりとる汁 同

ウツコトは海やうもりの松

物思ひく鳴く鶉かな 同
 牛叱る聲に鳴たつ夕かな 同
 一俵もとらで案山子の弓笑哉 同
 寒ければ寝られず寝ねば猶寒し 同
 叱られて次の間に立つ寒さ哉 同
 初霜や芦折れちがふ濱堤 同

(八) 志多野坡

志多野坡は越前の商人にて、初め江戸に遊び、後ち大阪に住し、柳木社と號す其の句には、清新奇抜なる意匠のもの少なからず、然れども又笨俗にして、讀むに足らざる句も多し。或る夜、盜賊その家に忍び入る、野坡の曰く、「我に一物の貯なし、唯だ茶一斤あり、今夜寒ければ柴折焚べて心よく寛話すべし」と、盜賊と相對して語る。此の盜賊また多少の風流心ありしと見え、机上に草庵の

野坡盜賊を感
せしむ

急火を逃れてと題して「我庵の櫻も寂し烟り先き」とあるを見附け、何の火事にやと問ひ、野坡爾々と答ふれば、左れば今、目前の有様をも句とすべきやと云ふに、野坡取敢へず「垣潜る雀ならなく雪の跡」とせしに、盜賊大に感じて出で行きたりとの話あり。

長松が親の名で來る御慶哉 野坡
 ほんのりと日のあたりたる柳哉 同
 靜かには啼かれぬ雉の調子哉 同
 郭公顔の出されぬ格子かな 同
 苗代や二王のやうな足の跡 同
 秋もやゝ鴈下り揃ふ寒さ哉 同
 小夜時雨隣の日はひきやみぬ 同
 人聲の夜半を過る寒さ哉 同

(九) 立花北枝

立花北枝は、芭蕉北國行脚の際、加賀金澤にて得たる門弟なり、彼れは弟の牧童と共に芭蕉の門に入る、家は磨工を業とせりと云ふ。彼れ初めて芭蕉を見るや、芭蕉、

赤々と日はつれなくも秋の山

の句を示して、態と北枝の才を試み、北枝再三讀返して、秋の山の三字に不満を抱くを見て、「北國に汝あれば、必正風の俳諧起るべし」と云ひたりとの話あり。秋の山を秋の風に改めたりとて、左程の名句なるべしとも思はれず、且つ此の事の眞偽も甚だ慥かならざれども、芭蕉が、其の才を認めたるの一事を察すべし、但し彼れも亦た尋常一様の俳人たるに過ぎず、名句は殆んど無し。其の後金澤の大火に其の家類焼し、「焼にけりされども花は散り澄し」と讀み、二度目の火災あり、友人從吾來り訪づれ、「諸ともに硯も筆もすみとなる烟の中

北枝没す。

に一句作麼生」とせしに、北枝こたへて、「諸共に硯も筆もすみとなり其の言の葉をかく物をなき」。何處までも滑稽なり、洒落なり。享保三年五月十二日没す。

鶯の巢と知れや梢に鶯の聲 北 枝

帆柱の並ぶや霧の向ひ島 同

淋しさや一尺消えて行く螢 同

乳を出して船漕ぐ蚤や露時雨 同

池の星またはらくと時雨哉 同

(十) 越智越人

越智越人は、尾張名古屋の人にて蕉門老弟の一人なり。貞享元年冬、七部集中の一なる『春の日』を選ぶ、此の集の價値は暫らく措き、之れが爲に蕉風將來の發展に益する所ありしは疑ふべからず。彼れ俳諧に熱中せる此の如く、嘗て芭

蕉に隨て行脚の約ありしも、何時しか發心の志も覺めて、若き女など出入する様になり、芭蕉も後の行脚には、其の亭に寄らず、何となく疎く成行しを後悔して、「羨まし思ひ切る時猫の戀」と云ふ句をなす、芭蕉其の懺悔をよみし、後の選集には、此の句を入れたり。芭蕉の没後、美濃の支考が、先師の夢想滑稽の傳など、忘言を搦へ、其の他多く杜選の書を出せるを憤慨し、『不猫蛇』を著はして、痛く之を攻撃せり。若しも越人の俳壇に於ける功績を擧げんか、『春の日』と『不猫蛇』との二書の選著にありとも云ふべきか、但し其の『不猫蛇』なるものも、

汝等がいふ所、何ぞ芭蕉にあるべき、我に逢ふて申て見るべし、其角、嵐雪、田舎にては杜國、越人などを置て、恐らく芭蕉の當流建立の趣意、汝等如き者どもの知る事にてなし云々、

不遜なる支考に對しての文章なるが故に、或は斯る言語を用ひたるやは知らざる

れども、文事を論ずる士君子の態度とは、如何にしても信ずる能はざる程なり隨て『不猫蛇』の價值も、亦た推測に難からず、且つ作句の伎倆に於ても、取立て、稱揚する程の事もなし。元祿十五年三月十四日没す。

- 若菜摘跡は木を割る島かな 越人
- 陽炎の抱きつけば我が衣かな 同
- 山吹にあぶなき岨の崩れかな 同
- かつこ鳥板屋の脊戸の一里塚 同
- 力なや麻刈るあとの秋の風 同
- 山寺に米搗くほととの月夜かな 同
- 稗の穂の馬逃かしたるけしき哉 同
- 行燈の煤けて寒き雪のくれ 同

(十一) 春花園凡兆

蕉門十哲の名が、後人の假托に出で、芭蕉の知らざる所なりとせば、何等の云ふべき所なしと雖も、若しも芭蕉にして、之を口外したるものとせば、芭蕉もまた其の選定を疎かにしたるの譏を免る、能はざるべし。其角、嵐雪を桃と櫻とに喩へて、左右の高弟と稱するは、我等に於ても差したる異議を有せざれども、其他の八人中、去來、丈草を除きては、殆んど尋常一様の俳人たるに過ぎず殊に凡兆の如き非凡の作者を、其の列外に出したるは、寧ろ不思議と云はざるを得ず。芭蕉は頗る嚴正なる人の如くなれども、其の門人の句を評するには、往々一時の感情に驅られて、深く之れを吟味せざりし跡なきに非ざれば、十哲の名稱の如きも、強ち許六、支考等の假托に出づるものとのみ云ふを得ざるものあらんか、それにしても、同じ『猿蓑』の選者たる、去來を入れて彼れを入れざりしは、深く疑ひを存する所なり、何人の選にもせよ、十哲中より春花園凡兆を脱したるは、著しき大失策なりと云はざるを得ず。

凡兆は加州金澤の人なり、東都に出て、醫を業とす、彼れが芭蕉の門に入りしは、其の中年の事にて、元祿の初年、芭蕉、江州の湖畔に客居し、折々京の嵯峨なる落柿舎に去來を訪ひたる際、凡兆と其の妻羽江とが、屢々往來して、風雅を樂しみ、同じ蚊帳の裏に去來等五人と、相共に雜魚寢したる事は、「嵯峨日記」に記する所なり、

去年の夏、凡兆が宅に臥したるに、二疊の蚊屋に四ヶ國の人ふしたり、思ふ事よつにして夢もまた四種と書捨たる事ともなと云出して笑ひぬ云々

凡兆と去來との共選に係れる『猿蓑』が、元祿三年より四年にかけての編纂なりとすれば、入門が其の以前なりし事は云ふに及ばず、入門後間もなく其の異才を認められたる事、並に芭蕉が彼れに對して、特別の情味を有したる事を知るべし、然るに何れの頃にや、彼れは和蘭船密貿易の事に坐し、一時は牢獄に投ぜられ、後ち青天白日の身となりて、縲紲の苦を免かれたれども、深く此の世

をはかなみ、好む所の俳諧をも棄て、輜晦して終る所を知らざる程なれば、蕉門中に於ても、或は彼の名を稱ふるを忌むものもありしか、殊に其の俳句は、加生の名を以て『曠野』に一二句、又凡兆の名を以て『猿蓑』に數十句、及び芭蕉の『嵯峨日記』の所々に掲載せられたる位にて、多く傳はらざるを遺憾とすれども、彼の句として今日に存するものは、概ね佳句と認むべきものゝみにて、他の俳人が數千萬句を残しながら、一として取るべきものなきに比すれば、量に於ては數十歩を譲るも、質に於ては數百倍の價值ありと云ふべし。唯だ其の詳細なる傳記の傳はらざるは、甚だ惜むべき事なり。

凡兆が一生の事業は、『猿蓑』の選集にあり、『猿蓑』は、單に蕉門俳句集中の隨一たるのみならず、集中に凡兆の句を最も多く網羅せるを以て、殊に尊しとす、何となれば、凡兆の句は、獨り此の集に依つてのみ、多くを見る事を得べければなり、今試みに彼の俳句を掲げて、其の特色ある風調を示さん。

| | |
|----------------|---|
| 灰捨て白梅うるむ垣根かな | 凡 |
| 鶯や下駄の齒につく小田の土 | 同 |
| 藏並ぶ裏は燕の通ひ路 | 同 |
| せりあげて葵をこぼす葵かな | 同 |
| ほとゝぎす何もなき野の門構 | 同 |
| 闇の夜や子供泣出す螢舟 | 同 |
| 市中は物のにほひや夏の月 | 同 |
| すゝしさや朝草門に荷ひ込 | 同 |
| 物の音ひとりたふるゝ案山子哉 | 同 |
| 初潮や鳴門の浪の飛脚舟 | 同 |
| 上行くと下くる雲や秋の天 | 同 |
| 百舌鳴くや入日さし込む女松原 | 同 |

凡 兆

しくるゝや黒木積む屋の窓明り
 禪寺の松の落葉や神無月
 炭竈に手負の猪の倒れけり
 門前の小家も遊ぶ冬至かな
 呼かへす鮒賣見えぬ霞かな
 下京や雪つむうへの夜のあめ
 長々と川一筋や雪の原
 鶯の巢の樟の枯枝に日は入りぬ
 同 同 同 同 同 同 同

凡兆の句特長

凡兆の句が、元祿の俳人に珍らしきは、其の客観的寫生の句に富める事なり。
 芭蕉は諸體を通じて之れを能くしたりとは云へ、尙ほ主観の句多く、其の他は
 客観の句を見る甚だ稀なる間に在つて、凡兆が獨り客観的寫生の句を巧みに
 し、之に依つて彼れの特色を發揮したるは、俳諧史上、特筆大書すべき功績に

して、凡兆若し多くの門弟を有し、其の門人に依つて、彼れの志を成就せしめ
 ば、客観的寫生の句の全盛を見る事、必らずしも天明の蕪村を待たざるものあ
 りしならんに、彼れの境遇が彼れを驅つて其の成功を見せしめざりしは、深く
 遺憾とせざるを得ず。次は彼れの俳句が、精練緊密にして、疎笨馳緩ならざる
 事なり、是れ亦た天明と其の調子を同するものあり、然るに芭蕉嘗て彼れに
 對して、「一字も仇にすべからず」と云ひしは、聊か不審に聞ゆれども、是れ彼
 れの句が平素疎慢なるの故を以て、芭蕉が然か云ひしにあらず、彼曾て、「雪つ
 む上の夜の雨」の十二字を得、之れに冠すべき上五六字を、彼れか此れかと種々
 置き替へて、芭蕉に謀りたるに、芭蕉もいろ／＼と考へたる末、「下京や」とす
 るに勝るものなし、若し勝るものあらば、我二度び俳諧を云はずと云ひたりと
 の話もあれば、「一字も仇に置くべからず」とは定めし斯る時の言葉なるべし、
 芭蕉は流石に彼れの異才を認めればこそ、共に切磋の勞を取りたるなれ。但

し當時の蕉門に在つて、彼れの俳句を超群のものと認めたるの徒は、果して幾人ありしか、彼れの名の比較的重んぜられず、又他の集に選拔せらるゝ事の少なきは、蓋し之れが爲めなるべし、理を以て言へば、凡兆の句は當に天明調の先驅者たらざるべからず、然るに蕪村の明を以てして、尙ほ此を看破せざりしか、所謂五子の風韻を擧げて、遂に凡兆に及ばざりしは、知己を得るの難き事千古同一轍なりと謂はざるべからず。

(十二) 廣瀬 惟然

惟然坊は能州の人、素と富有なりしも、後は甚だ貧し、嘗て蕉門に遊び俳諧の狂者として呼ばる、生涯破れたる篋笠一襲にて、風雨を凌ぐ。或年四國行脚の時、播州の知人を訪づれたるに、其の風體の、如何にもむさくるしきより、其の家の主人、布一疋を與へたれば、惟然喜んで出でゆき、或る旅宿に到りて布を出し、着物の仕立を頼み、餘りの布を縫賃として與へ、翌朝これを着て出立

惟然の性行

したるが、間もなく立ち戻りて、「新らしき物は着心地わるし、矢張以前のものよし」とて、前きの垢附きたるを着、新らしきを捨て、跡をも見ずして立ち去れりとの奇談あり、其の他この僧に就ての、面白き話は數多し、何處までも風狂を以て、一生を終りたる人なり。

| | | |
|---------------|---|---|
| 風呂敷へ落ちよ包まむ舞雲雀 | 惟 | 然 |
| 更行くや水田の上の天の川 | 同 | |
| 別るゝや柿くひながら坂の上 | 同 | |
| 凧や刈田の畔の鐵氣水 | 同 | |
| 水鳥や向ふの岸へつらゝく | 同 | |

其他岩田涼菴、江佐尙白、山本荷兮、天野桃隣、服部土芳、澤露川等、尙多くの俳人あれども、一々其の傳記を掲ぐるも煩はしければ、各その二三句を摘録

すべし。

鞍壺に日は長閑なり我肝

涼菟

宮島や廻廊に夜の明け易き

同

雨の手に美濃と近江や鳴子引

同

朝霧や廊下をのぼる人の聲

同

毛蒲團やこはい夢見る後夜の鐘

同

雉の尾に春風ゆらく日かけ哉

尙白

客は誰乳母が處に青籠

同

鹽添へて草の香淺き粽哉

同

湖を屋根から見せん村時雨

同

よろくと撫子残る枯野哉

同

陽炎や取りつきかぬる雪の上

荷兮

蝙蝠に亂るゝ月の柳哉

同

面襷や明石のとまり時鳥

同

秋の日やちらく動く水の上

同

石臼も夜になれこし苔の花

桃隣

水鳥の巢もや引けん菖蒲草

同

石川や築うつ時の薄濁り

同

御火焼や鍛冶が傳へし古烏帽子

同

陽炎やほろく落る岸の砂

土芳

笥やひそかにぬけし垣の上

同

物いへば二人のやうな秋の暮

同

時鳥雪踏みはづし

露川

冬籠扇の釣手の團扇哉

同

大佛のうしろに花のさかり哉
ほのくぼに雁落ちかゝる霜夜哉
便船や雲雀の聲の潮ぐもり
時鳥啼くや木の間の角櫓
水風呂をよるまはれたる十夜哉

△嵐雪門

仇人に逢つ別れつ若菜かな
めきくと長閑になりぬ麥島
角力取と並んで寝たる暑さ哉
粥すゝる夜べに成りけり鹿の聲
鵬のいかり毛寒き嵐かな
また来たよ例の齒ぬけの鉢敲

二七〇

路通

史邦

同

吏登

同

同

同

同

同

△涼菟門(伊勢派)

閑古鳥我も淋しいか飛で行く
浮草や今日はあちらの岸に咲
鹿の音のとゝかぬ山はまた青し
はては皆扇の骨や秋の風

△支考門(美濃派)

相宿のものうき蚊帳の軒かな
松に菊留守恙なしあれながら
何として張良遅し橋の霜
染上て竿にかけばや藤の花
鴉から鷺に明たり更衣
南天や雪の花ちる手水鉢

由(夢林)

乙

同同

廬元

同

同

巴都

同

同

二七一

(十三) 芭蕉六感

是亦た恐く後人の偽作たるべしと雖も、雪中庵蓼太すら、『湖東問題』に跋して此の六感を掲げれば、久しく實事として信ぜられたるものゝ如し、左れど其の去來の「應々の句」に對して、正秀が、「唯先師の聞たまはざるをうらむのみ」と云ひしを以て見れば、察する所、支考の一派が、去來の『湖東問題の序』を本として、斯く割出したるものならんかとも思はる。但し有名の話なれば、蕉門諸俳士に對する品評の一端として参考の爲め左に之を掲ぐ。

花やかなる事其角に及ばず

名月や 壘の上に松の影

からびたる事嵐雪に及ばず

梅 一りん 一りんほどの暖さ

ほとけたる事支考に及ばず

そこもと は涼しさう也峯の松

閑なる事文章に及ばず

蛸を出て、又障子あり夏の月

かるき事野坡に及ばず

長松が親の名で來る御慶哉

實なる事去來に及ばず

應々といへど叩くや雪の門

第八章 蕉門以外の俳人

(一) 山口素堂

山口素堂、通稱は官兵衛、後市右衛門、來雪又は信章齋、別に葛飾隱士と號し字は子晋とも云へり。寛永二十年、甲斐巨摩郡山口に生れ、後甲府に移る。初

め江戸に出で、林春齋に従て漢籍を學ぶ、彼れが漢學の力に就ては、芭蕉もまた之れを稱揚したりとて、如何にも碩學なりしが如く傳ふるものあれども、漢學者としての彼れは、餘りに斯道の記録にも見えず、恐らく俳諧仲間にての巨擘たりしと云ふ位に過ぎざるべきか、後京に遊びて北村季吟の門に入り、連歌俳諧を學ぶ。芭蕉と交を結びたるは此の時にて、季吟門下の双壁を以て稱せらる。彼れは再び江戸に出で、東叡山の麓に居りしが、去つて葛飾(深川)に庵を結び、其日庵一世となり、所謂葛飾風一派を起せり。彼れの葛飾に在るや芭蕉もまた其の川上に庵を結び、往來相親みたるものと見え、芭蕉が「深川五本松といふところに舟をさして」と題し、

川上と此の川下や月を友
芭蕉

と讀みしは、素堂との交情を叙したるものなるべし。殊に素堂は芭蕉より長ずる事一歳なれば、芭蕉もまた之れに向て常に敬意を欠かず、往々素堂先生の名を

素堂と芭蕉

葛飾風

素堂没す

以て書面を與へたる事もありしと云ふ。享保二年八月十五日行年七十五歳にして没す、谷中感應寺中瑞香院に葬る。又小石川指ヶ谷町巖淨院及甲府尊體寺にも、其の墓ありと云ふ。

斯くて俳壇に於ける素堂の地位如何を顧みるに、彼れは作句に於て、素より儕輩を超絶せるのみならず、早く既に連歌俳諧の域を脱して、真正俳句の獨立に着眼したるが、彼れは單に俳人として世に處するを好まず、儒を賣つて衣食の料に供し居たる程なれば、俳諧の新風開發をば、芭蕉に譲りて、季吟と共に之れを奨勵せるもの、如し、而も彼れが俳句の研究に力めたる結果は、斬新、眼を驚かす事、寧ろ芭蕉の上でありしが、芭蕉の俳風は、次第に進歩開展するに反し、素堂の葛飾風は、舊態依然として、多くの變化を見ざるが上に、俳諧を以て天下に鳴らんとするの野心も乏しければ、行脚せず、門人を食らず、遂には蕉風の爲に壓倒せらるゝに至りしも、天和の新調を工夫するに當つて、彼れ

の功勞は、實に偉大なるものあり、隨て此の新調を基として進歩發達したる元祿の蕉風が、素堂に負ふ所のものは、決して少なからざりしなり、其の門に山口黒露、長谷川馬光あり、馬光の門に溝口素丸あり、加藤野逸、關根白芹、飯田無物の諸弟を従へて、葛飾風を維持したり。小林一茶の江戸に出るや、また素丸の門に入りて、俳諧を學びたりと云ふ。

春もはや山吹白く芭苦し 素堂

喜撰法師螢の歌もよまれけり 同

目には青葉山郭公はつ鱈 同

浮葉卷葉此蓮風情過たらん 同

綿の花たま〜蘭に似たる哉 同

水瓜獨り野分を知らぬ朝かな 同

名も知らぬ小草花さく野菊かな 同

塔高し梢の秋の嵐より 同
網さらす松原ばかりしぐれ哉 同
歎けとて瓢ぞ残る霜の垣 同

(二) 大淀三千風

延寶の頃、一日獨吟三千句を吐き、片時に數幅の紙牋に書し、以て其號と爲したる大淀三千風と云ふ者あり。伊勢射和村の人にして、寓言堂又大箭數と號し、十五歳にして俳諧に志さし、和漢の學に通じ、文章を好くせり。和歌連俳は師門に入らず、三十一にして出家して、吞空法師と號す。我邦名所舊蹟歴遊の志を起し、先づ仙臺に赴き、此に居ること十五年、天和三年春仙臺を發し、元祿二年頃に至るまで、前後七年にて行脚を終り、一旦射和に歸り、後又相州に赴きて、西行の舊跡鴨立澤を再建し、東往居士と號し、鴨立庵の開祖となる。日本行脚文集七卷は、實に驚くべき大著なり。其他『仙臺大箭數』、『松島一色兩

吟集』等今尚ほ傳はれり。

二七八

山 醉 花

風の口珠をも吐逆につまけり花

鵝の囀りにさく撥毒圓

覺書傳受の春日にほひ來て

一子に見する月を殘れる

杖柱になりそうであじやる初紅葉

ゆるりと三間とをつた小男鹿

木つけ馬飼はまれなり嶮岨也

やかぬさきから足手はかた炭

(仙臺大筋敷)

園女

第九章 元祿の五俳女

一、園女 園女は伊勢松坂の人、(或は云ふ山田の洞官渡會氏の女)、備前の人岡西惟中の妻となりて浪花に住す。俳諧は初め杉本美津女に學び、元祿二年の冬芭蕉の門に入る。芭蕉の同地に行脚せる時、招きて厚く之を饗し、有名なる白菊の句を與へられしが、夫死して東武に下り、芭蕉に隨從し、芭蕉没して後は其角に附きて學ぶ事一年、京洛を逍遙して江戸に歸り、深川に住して眼科醫を業とせり。友人琴風が記に依れば、此の女昔しより世事に疎く、袖下の紅絹を切て下駄の花緒に換へ、張文庫の蓋を取て水ながしに用ひたる事もありと云ふ深川八幡に、歌仙櫻とて園女が植ゑたる三十六本の櫻ある由、『江戸砂子』に見えられたるも、今は過半枯れ果てたり。後年佛道に入りて頭を丸め、享保八年名を智鏡尼と改めたるも、尚ほ真中に十筋ばかりの髪を殘せるも可笑かりしと、

二七九

或時雲虎和尚に答ふる書に、

來書の趣拜見申候不求真不求忘は大道の根源誰も存する所憚ながら珍からず候一心源頭に上ての所作柳は緑り花は紅る唯その儘にして常に句をいひ歌を綴りて遊び申候事に候無益の口業ならば一切經も無益の口業にて候法臭事候は嫌にて我平日の行は念佛と句と歌となり極樂へは行はよし地獄へ落るは目出たし和玉韻、自己念其不覓心、清燈已耀一燈心、市中點々有明鏡、全識人間清淨心、「誰か見ん誰か知るべき有にあらす無にもあらぬ法のともし火」不遜にして婦徳を欠くの嫌なさにあらすと雖も、また識見氣慨の男子も及ばざるものあり、されど其の俳句は、婦女子の面目を存して、讀むべきもの無さにあらず。享保十一年四月二十日、六十三にして没す。

夜 あらし や 太閤様の 櫻狩 同
手をのべて折ゆく春の草木かな 同
山松のあはひくや花の雲 同

鼻紙の間にしほむ董かな 同

當麻のまんだらを拜みて

衣がへ自ら織らぬ罪ふかし 同
負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉 同
有る程の伊達しつくして紙衣かな 同

捨女

二、捨女 捨女は丹波國柏原に生る、六歳の冬「雪の朝二の字くの下駄の跡」の句を吐きて人を驚かす、始め北村秀吟に従て和歌を學び、俳諧は後、松堅によると云ふ。「粟の穂やみは敷ならぬ女郎花」と吟じて二十歳の頃宗族田氏に嫁し、程なく寡婦となり、髪を剃りて妙融と云ふ。若き頃は淨土律を學びしも、老て盤桂禪師の門に入り、播州網干の里に草庵を結びて、不徹庵と號す。元祿十一年八月その地に没す、行年六十五。諡して嶺雲貞閑禪尼と云ふ。

うき事になれて雪間の嫁菜かな 同
日くらしや捨て、ちいでも暮るゝ日を 同

思ふ事なき顔しても秋のくれ

二八二 同

三、智月尼 智月尼は其の子乙州と共に芭蕉を師として俳諧を學ぶ、或る年乙州の東行を送りて「わざとさへ見にゆく旅を富士の雪」と讀む。晩年芭蕉に向つて紙筆を備へ、紙子の袖をかき合せて、我に形見となるべき物書て残したまへと望む、芭蕉點頭きながら、「六十路に近き尼に形見を乞はれていと力なし」と戯れながら、書きて與へたりとなり、芭蕉が此の世を去りしは、同じ年の事なりき。

鶯に手元やすめん流し本 智月

有と無と二本さしけりけしの花 同

盆に死ぬ佛の中の佛かな 同

我形も哀れに見ゆる枯野かな 同

木枯や色にも見えずちりもせず 同

四、秋色 秋色は江戸の人、名はあき、十三歳の春、上野の花見に行き、清水寺観音堂のうしろ、井の端の櫻を見て、有名なる「井戸端の櫻あぶなし酒の酔」の句を讀み、又其角が門に入る時、「蜷とり早苗に並ぶ女かな」と吟ず。其角放蕩にして所を定めず、多くは秋色の家に宿る、故に其の没後、暫らく其角の實印を借りて用ひ、晩年之を湖十に傳ふ。或る時某侯の山莊に召さる、其の庭園世にも美しとの評判なれば、秋色の父、之れを幸ひと、其家従に身をやつし、心のまゝに見終りし折節、雨はげしく降り出したれば、歸路は駕を命じて送らる、秋色は父が供して雨に苦しむを見兼ねて、駕昇に用を命じ、其の間に父と入りかはり、其の紙合羽をまとひ、竹子笠をかぶり、裾高々に引上げ、駕に添ひて歸りし事あり。秋色初め照降町の菓子屋大目が妻たりし事ありと云へど、其の後の事は詳かならず、享保十年四月十九日没す。

戀せずば猫の心の恐ろしや 秋色

雉の尾のやさしうさはる董かな
 同
 みすさげて誰妻ならん涼舟
 同
 佛めきて心おかるゝはちす哉
 同
 ものゝふの紅葉にこりず女とは
 同
 獨居やしにかみ火鉢も夜半の伽
 同
 五、千代女 時代は少し後れたれども、此に列なるべき一人の女流俳人あり、
 加賀の千代なり。千代は加賀松任の人、表装師彌八の妻なり。幼にして俳諧を
 好む、然れども僻邑師に乏し、會々支考の門人廬元、行脚して松任に到る。千
 代女其の旅宿を叩く、廬元既に寝にあり、千代女就て志を述べ致を乞ふ、試み
 に時鳥の題を與ふ、句成るに及び、廬元一覽せしのみにて、捨てゝ願みず、更
 に一句を作るに復た願みず、而して廬元は眠りに入れり、彼れが傲慢の態度憎
 むべし、然れども千代女は去らずして、沈吟曉に達す。廬元一睡、醒めて問ふ

て曰、夜明けたりやと、時に千代女一句を吐く、

時鳥 くゝとて明けにけり 千代

と、是に於て廬元大に嘆賞して曰く、「是なり是なり、以て止ますんば、終に其
 の堂に上らん」と。二十五歳にして、夫死す、自ら尼となり、素園また妙林と
 號す。後支考を慕ひ、終に乙由を師とす、千代女書を越後の吳俊明に學びて頗
 る風致あり、彼れの俳句には、人口に膾炙せるもの甚だ多し、安永四年九月没
 す、行年七十四(或云七十五)。

仕事ならくるゝをしまじ若菜摘 千代
 足跡は男なりけり初櫻 同
 男さへきかれぬものを郭公 同
 けふばかり男をつかふ田植哉 同
 早をとめや若菜つみたる連もあり 同

紅さいた口もわする、清水かな

同

始めて夫に見えたる時

澁かろかしらねど柿の初契

同

我子を失ひける時

蜻蜒釣今日は何處まで行つたやら

同

白きくや紅さいた手の恐ろしき

同

尼になりしとき

髪を結ふ手のひまあいてこたつ哉

同

第十章 芭蕉没後の俳壇

(一) 元祿の群雄割據

蕉風流行の版圖は、日本全國に互りて、甚だ廣かりしと雖も、其角、嵐雪を始

め、蕉門の錚々たる俳人は多く江戸に在り、加ふるに其の門人中また有力の者
少なからず、隨て東都の俳壇は、何時しか全國の大勢を左右するに至り、所謂
美濃風、伊勢風も次第に本來の面目を失ひ、終に東都の俳壇に其の聲譽を奪は
れ、芭蕉没後の俳壇は、一時東都俳人の占有に歸したる有様なりしが、左りと
て敢て統一されたるに非ず、實は群雄割據、自己の門戸を張らんが爲に、擠排
漸く盛んなるに至れり。就中支考の如きは、芭蕉の遺訓と偽り、傳授、法式、
規則等に關する多數の著作を公にし、蕉門傳授の眞を得たるものは、我れ一人
なりと威張り、越人『不猫蛇』を著はして、之れを駁し、次で支考の『削り掛の
返詞』、『露川責』、露川の『合楸』、荷今の『橋守』等また續々世に現はれ、許六
も亦た同門を罵倒して獨り自説を誇張し、駁論、反駁、紛々擾々、俳論の域を
脱して、人身攻撃に互るも少なからず。支考、許六の徒は、此の如くにして、
頻りに跋扈すれども、其角、嵐雪は黙して語らず、素堂は憤然として、此波瀾

其角邪路に入る

に當らん事を去來に計りたるも、去來應せず、杉風は、老いて漫りに風波を避けんとを力め、紛擾益々多くして、蕉風の真髓を距ると愈々遠く、遂には其角が洒落風の如きもの、流行を來すに至り、左しにも非常の勢力を有したりし蕉風の俳壇も、次第に俗化の方面に傾きたるこそ是非なけれ。是れ時運の然らしむる所と云へ、素堂、杉風、去來の如きは、其の人物到底此の如き大勢を左右するの力量を有せず、偶々其の人と思はるゝ其角は邪道に入つて恬として顧みざる等、要するに之れを統一するに足るの人物を欠きたるが爲めなるべし。今其の割據の狀を示せば左の如し。

蕉門の勢力分布

- △江戸 其角、嵐雪、杉風、枳風、文麟、卜尺、利牛、嵐蘭、破立、
- △大坂 之道、祇空、吞舟、舍羅、
- △京都 野明、去來、野童、風國、史邦、
- △近江 正秀、乙州、智月尼、千那、酒堂、李山、曲翠、木節、路通、許六

尙白、丈草、

- △美濃 支考、惟然、木因、荆口、如行、
- △尾張 杜國、露川、野水、越人、荷兮、日葉、
- △伊賀 土芳、桃隣、猿雖、荻子、半殘、
- △伊勢 涼風、晨風、固女、
- △三河 白雪、桃先、桃後、
- △加賀 北枝、牧童、凡兆、勾空、秋の坊、
- △越前 野坡、
- △越中 浪化、
- △信濃 曾良、
- △長崎 卯七、

(二) 洒落風と化鳥風

其角の江戸座は元祿の末に至り、洒落風と名くる一種の俳風を起し、此の俳風は、纏て蕉風を墮落せしむるの一原因となれり。積翠園の『俳諧或問』に曰く、

江戸座

沾涼が『鳥山彦』に、其角元祿の末に洒落風といへる一體を發して、尋常の俳諧には、十點を限りとし、洒落風には、半面美人の印を五十點として用ひたるよしを書けり、又不角流に不易志雨風辨と云ふ書有り、其中に其角没して後は、其角が門人みな沾徳を師とす、沾徳又風を變じて益々調を残し、心を餘して聞ほどく事を風とす云々、

又、『鳥山彦』に曰く、

芭蕉翁の風は連歌の柔なると、古流の強との厥中ダクマンキをとりて、優豔にしたてたる上品の俳風なれば、都鄙統てこれに傾きけるなり。又元祿の末に晉子其角洒落俳諧といふ付合の一體を起す。岸本調和、河曲一峰、大野秀和、岩本子英等の宗匠、合體して當時の洒落と云俳諧は謎字の體に似て、しかも一句の訣別なし、當風正風體と云ふは、是に過べからずと、つげの枕と云書を編す。北藤浮生原俳論といへる小冊子を以て、其返答をして正風を化鳥俳諧と誹謗

しけるより、華江の俳諧二派に別れぬ云々。

今其の一例を示さんか、

| | | |
|--------------|---|---|
| 日本の風呂吹といへ比叡山 | 其 | 角 |
| いさよひや龍眼肉のから衣 | 同 | |

之を解するもの曰く、初の句は比叡山には坊の數三千あるより思ひ付きて、天台根本の臺根を大根と見たて、三千坊を三千本と訛り、さては三千本の風呂吹と爲したるにて、後者は十五夜の明るまで月を賞し、十六日の夜は我眼も心も昨日より草臥たれば、龍眼肉の殻も同様にて、とても之れを賞するを得ずとの意なり、共に謎として見るべきものなり云々。

俳風斯く墮落し來て、蕉門の名士また續々此の世を去る。即ち元祿十五年越人死し、寶永元年丈草、去來、猿雖死し、四年其角、嵐雪相次で死し、六年曾良死し、七年惟然死し、正徳五年許六死し、享保二年涼菴、素堂死し、残るは支

化鳥風の用語

考の一派のみ。秋風落葉、蕉風の命脈將に絶えなんとするに當り、其角の没後彼の洒落風は水間沾徳(談林派露沾門)に移り、立羽不角の化鳥風と相對して、東都の俳壇を蹂躪したり、所謂「化鳥風」なるものは、文學上更に何等の價値あるに非ず、例へば蟬にシン／＼、猫にスット等の振假名を施し、又貫之を面雪と書き、長點飛ぶといひて驚に用ひたる等、眞の遊戯文字に過ぎざるは云ふ迄もなし。加之俳風、俳人の墮落に最も力ある、彼の入式、點料等の掟を定めたるも、此の沾徳にして、沾徳、不角、及び松木淡々等が、點料に依て非常の贅澤をなしたるは、實に後世の爲に惡標本を示し、業俳の臭氣紛々として、鼻を突くに至りたるは、最も慨嘆すべき事にこそ。

沾徳

| | | | | | |
|----|-----|----|-------|------|---|
| 遠乗 | や鞭 | は柳 | のあり次第 | 沾徳 | |
| つい | こけて | 寐 | よとの鐘 | や花の蔭 | 同 |
| 九牛 | が毛桃 | の色 | や稻荷 | 前 | 同 |

不角

| | | | | | | | |
|----|----|-----|-----|------|----|----|---|
| 海に | 濡て | かわく | や月の | 東山 | 同 | | |
| 冬あ | かし | 家に | そふ木 | と土手の | 草 | 同 | |
| 山櫻 | 高く | 笑は | ばちり | ぬべし | 不角 | | |
| 葉が | くれ | に人 | の生木 | よ夕涼 | 同 | | |
| 秋の | 雲 | 泪 | なそへ | て鼻毛 | ぬき | 同 | |
| 網代 | 木の | ゆる | きやみ | ぬる | 氷哉 | 同 | |
| 三度 | 目の | 雪 | なん | 只の | 雪の | くれ | 同 |

(三) 享保の五色墨

五色墨とは、享保十六年、中川風葉、松木蓮之、大塲咫尺、長谷川素丸、佐久間長水の徒が、沾州の卑野陋劣に對して、互判四吟の歌仙五軸を催したるを稱するものにて、江戸に此の五俳あり、浪花の淡々また東下して之に加はり、相結託して正風の復興を企んとしたるも、如何せん力量足らずして其の望を達す

る能はず、長水は麥阿(後に柳居)と改めて乙由に従ひ、素丸は馬光と改めて素堂門に入り、風葉は宗瑞となりて杉風に歸し、蓮之は珪林となり、咫尺は寥和となりて嵐雪の流を汲めり。

素丸

土べたに子を這はせちく菜摘哉 素丸

海苔搔の臍の長さよ夕日影 同

釣鐘に横日の残る暑さかな 同

菜の花や引残したる窓の前 蓮之

踊りかな京は女の多いこと 同

しぐるゝや傾城町も神無月 同

鶯の嘴ふりすゝげ手水鉢 宗瑞

米つきにこぼれかゝるや花卵木 同

ぬけ道や落葉かくれの溜り雨 同

蓮之

宗瑞

咫尺

紙漉の窓の低さに蛙かな 咫尺

參宮の笠を着て居る案山子哉 同

埋火に年よる膝のちひさゝよ 同

紅梅に青く横たふ寛かな 柳居

菜の花や赫奕として寺一つ 同

もろこしは裏を見るかも雲の峰 同

我庵は下手の建てたる野分哉 同

(四) 松木淡々

松木淡々は、自から其角の高弟と稱して、其の洒落風を傳へ、享保年間に於ける浪花の一雄鎮として、俳壇の勢力、侮るべからざるものありしとは云へ、試みに其の句集を取つて之を讀まんか、所謂洒落風の弊竇頻々として發見され、十中八九は難解の句たるを免れず。彼は作句に於て、後世に何等の益を與へた

柳居

る事なしと云ふも、恐らく過言に非ざるべし。然れども彼れは其角が題材を擇ばず、如何なるものにて、悉く之を俳化せんと苦心せる其の苦心の跡を學んで、俳句の範圍を擴張したる事、及び其の句品の賤劣、醜陋ならざりし事とは、慥かに記憶すべき價値を有するものたらざるべからず。

眞菜瓜されば思へば年一夜 淡々

としの内に日光はさぞ初霞 同

寒垢の人に戻りて袷かな 同

蒸殺す飯にもあらず女郎花 同

茶の花のほしの林や雨の中 同

享保は、實に俳諧過渡の時代にして、一方には前代の俗臭を帯びながら、又他方には天明復興の爲に、其の素地を作るものなからず、綿屋希因は、中川乙由の門に出で、後に蝶夢、涼帝、蘭更、二柳を出し、白井鳥醉が同門佐久間柳

享保の俳壇

希因

居の高弟として、更に其門より白雄、百明を出し、而して横井也有が、太田巴靜の門に出で、滑稽一點張にて、一代を終始したるは、後の一茶と共に、天下の珍とする所なり。其他百里、琴風の輩あれども、取立て、云ふ程の事もなし

盗人の後で棒ふる柳かな 希因

こち向けと蔓を動かす瓢かな 同

桐の實のふかれくて初時雨 同

天の際にちらはる人や沙干狩 鳥一醉

閑古鳥舟は向ふの岸にあり 同

編笠の昔男や節季候 同

足と鍬三本洗ふ田打かな 也 有

此花と札にはありて若葉哉 同

大將は負れて出るや螢狩 同

鳥醉

也有

芋の葉や蓮かと問又は頭振る 同
追剝のながめて通す紙衣哉 同

第十一章 元祿重要俳書解題

元祿の盛事を記念すべく、蕉門に關係せる著作は極めて多く、一々之を掲ぐるは煩に堪へず、就中重要と思はるゝものを擧げ、且つ聊か解題を附せん

(一) 芭蕉

- ▲貝おほひ 一卷
- ▲常盤屋之句合 一卷
- ▲春の日 一卷
- ▲鹿島紀行 一卷
- ▲笈の小文 一卷
- ▲田舎之句合 一卷
- ▲冬の日 一卷
- ▲野ざらし紀行 一卷
- ▲綴の松原 一卷
- ▲更科紀行 一卷

- ▲奥の細道 一卷
- ▲ひさご 一卷
- ▲猿蓑 二卷
- ▲炭俵 二卷
- ▲芭蕉翁文集 一卷
- ▲あちら野 三卷
- ▲嵯峨日記 一卷
- ▲綴猿蓑 二卷
- ▲芭蕉翁句集 一卷
- ▲枯尾花 二卷

▲貝おほひは、寛文十二年翁二十九歳の正月、伊賀上野天満宮奉納の三十番句合也。

▲田舎の句合は、延寶八年、翁三十七歳の仲秋、其角撰の二十五番句合に判詞を加へしものなり。

▲常盤屋の句合は、おなし年の季秋、杉風撰の青物の句合二十五番に、判詞あるものなり。

▲冬の日は、別に尾張五歌仙といふ、貞享元年翁四十歳の秋、東都發足、伊勢參宮、大和山城近江美濃を経て、尾張へ出づる途の撰集也、荷今野水の盟興て力あり。

▲春の日は、冬の日撰ありし次の年、翁四十一歳の春、京伊勢より再び尾張へ出でての撰也、春の日となつくるは前著の冬の日に對せしなり。

▲野ざらし紀行は、また甲子吟行ともいふ、冬の日撰ありし年の道の記也。

▲鹿島紀行は、貞享二年八月鹿島詣の道の記也、翁の眞蹟を上木せしものを鹿島詣と題す、此眞蹟は鹿

島より八里、船路小川といふ處の、本間道憲といふ醫師の許にありしを、秋風といふものか得て、自筆のまゝに寫して世にひろめたるものなり。

△續の松原は、貞享四年、翁四十四歳の時、不卜才丸其角等が撰びし四季の句合也、判者四人、素堂調和湖春及翁也、

△笈の小文は、貞享四年の冬より、同五年の夏まで、東海道の諸州より、伊賀伊勢吉野須磨を行脚したる道の記なり、一書に庚午紀行とあるは誤れり、庚午は元祿三年なればなり。

△更科紀行は、元祿元年、翁四十五歳の八月、美濃路より姥捨山觀月の道の記也。

△奥の細道は、元祿二年、翁四十六歳の三月、東都發足、奥羽行脚の道の記也、四月一日日光山、五月四日仙臺、六月三日羽黒山、七月六日越後今町、同十五日加賀金澤、八月十四日越前敦賀、同月美濃大垣、九月六日伊勢參宮に筆を止む、元祿十年冬大坂の客舎に於て、晉其角眞蹟について校合せり、素龍の跋あり。

△あら野は、元祿元年の秋より、二年の夏までの撰也、四時の景物、雪月花、郭公はいふに及ばず、雖名所旅途懷戀無常釋教神祇祝等の發句、及古人の吟まで、刈りよせて、あら野の名にそむかず、員外の連句十卷は、荷谷野水越人等を、重なる作者となす、冬の日春の日に比すれば俳諧和かにして輕し。

△ひさごは、元祿三年、翁四十七歳の春、伊勢の歸るさの秋を、湖南にとめられし時、珍碩等の需に應じて、撰みしもの也、歌仙五卷を收む。

△嵯峨日記は、元祿四年四月より、五月まで、嵯峨の落柿舎に閑居せし頃の日記也。

△猿蓑は元祿三年より四年の間、去來凡兆等の需に應じて撰びし集なり、其角が序文に、其盛事を發す俳諧は實を以て勝れり。

△炭俵は、野坡利牛狐屋等の撰にて、元祿六年の春より、同七月の夏までに成りし集也、無味の中に味をもとめて、世に花實兼備と稱す。

△續さるのみは、翁遷化の後、伊賀の松尾家にありし草稿を、書肆井筒屋が、懇望して上梓せしもの也、世に支考の偽作を、翁の撰集と披靡せしなど種々の説をなすものあるは、其風調すこしくだけたる處あればならむ。

△芭蕉翁句集は、嘉佛令湖中が、一葉集によりて校合せしもの、寛文延寶天和時代の分は、四季ともに帖のはしめに置く、貞享元祿の分は、前後にかはらず、其類によりて載す、無季の分は、卷末に出す。

△芭蕉翁文集は、以上の卷々にもれたる文章を集めたる也、芭蕉翁文集、風俗文撰、小文庫、句塞卯辰

集、文撰等の諸集を取捨せり。

△枯尾花は、元祿七年十二月十二日、翁五十一歳にて遷化ありし終焉記をはじめとして、追善の連句發句をのす。

△俳諧七部集 以上揚げたる中、冬の日、春の日、あち野、ひさご、猿みの、炭俵、續猿みの、七書を稱するものにて古來正風の骨髄と稱せられ、正風の俳諧を知らんと欲するものは云ふに及ばず、苟も俳諧を語らんと欲せば、是非とも精讀すべき書なり。

(二) 其角

其角の著書中重要なるもの十四種あり、其の年代に依て、左に之れを排列す。

- ▲虚栗集 一卷
- ▲新山家 一卷
- ▲雑談集 二卷
- ▲萩の露 一卷
- ▲句兄弟 二卷
- ▲若葉合 一卷
- ▲末若葉 二卷
- ▲俳諧錦緞 二卷
- ▲焦尾琴 三卷
- ▲たれか家 一卷

▲新二百韵 一卷

▲五元集 二卷

▲五元集拾遺 一卷

▲綴五元集 三卷

△虚栗集は、天和三年、其角二十三歳の五月選集せるものなり、談林漸く衰て、蕉風將に起らんとするの時、此書世に行はる、蕉門開發の案内者とも謂ふべし。

△新山家は、貞享二年、其角二十五歳の五月、箱根木賀山の温泉に遊び、歸途江の島鎌倉金澤に廻りたる道の記なり。

△雑談集は、元祿四年、其角三十一歳の正月の筆なり、自己の閱歷に係る俳話を主として載録す。

△萩の露は、元祿六年、其角三十三歳の八月の起草なり、父東順が病没に近き家事の状況と、夏夜の吟懐とを記す、能く其角の性格を寫したる書なり。

△句兄弟は、元祿七年七月、其角三十四歳の時、古今に秀逸の聞えある類句を對照し、判同を加へたるものを旨として刊行せり。

△末若葉は、元祿十年、其角三十七歳の五月の選集なり。

△俳諧錦緞は、末若葉を出せる同年冬の上梓にして、他の選集に散録せる、俳諧及び断片を聚めて、再び一書となせしものなり。

△傳尾學は、元祿十四年、其角四十一歳の三月選するものなり、元祿十一年の十二月十日、其角火災に罹りて、平生の大切なる日記を焼失したれば、同游の許に反古を探り、忘れたるを思ひ出し、遂に此集を作れり。

△たれか家は、元祿三年、其角三十歳の時、又新二百韵は天和三年其角二十三歳の時の選集なり。

△五元集及び五元集拾遺は、其角の没後四十年、延享四年に、百萬坊旨原その遺稿を得て、世に出せしものにて、其角の自筆に係る。

△綴五元集は、同く旨原が其の後五年、寶曆二年に梓行せるものなり。

△其他花時鳥、蘇集、綴虚栗、新三百韻、いつな昔、花摘、此花集、三上吟、類柑子等の選集あり。

(三) 嵐雪

△玄峰集 (百萬坊旨原輯)原書に左の序文あり。

かくともなく集るともなく机上に一書ありみな雪中庵嵐雪のほくなりひとりこれを紐といてまもりをるひるつかた例の竹川助來りてたまへ梓にきさまんといふさはまでかうふりして得させんとて玄峰集とものしうちくれぬ、

百萬坊旨原

此の旨原と云へるは、百萬樓伽羅港の初世にして、獨歩巷超波の門人也、本姓小林氏江戸に住む、安永七年六月十六日卒す、築地西本願寺々中覺證寺に葬る。旨原、其角が綴五元集と此玄峰集を世に遺し、晋派雪門の爲に盡せり、嵐雪の句を録するもの、古來極めて少なく、玄峰集は殆んど其の唯一の句集たるべし。

▲嵐雪發句撮解(能靜莊丹口述) 嵐雪の句を講述し之を榮窓菜英の校定せるものなり。

▲嵐雪文集(葵太選) 收むる所の嵐雪の俳文は、其の數多からすと雖も、嵐雪を知るの便りとなること少からざるべし。

▲嵐雪俳諧集 嵐雪の附會に係る俳諧にして、各種の選集に掲げられたるものを集む。

▲嵐雪選集 嵐雪の發句、俳諧を選録したる其袋、及び東潮獨吟披露集とて、東潮の家にて、萬句興行の時の諸俳士の發句俳諧を集めたるものなり。

▲吏登句集(振々亭三編選) 吏登は嵐雪の門に出で、其の門また葵太を出す、此の集は、天明七年の選にて、葵太の校正を経たるものなり。

(四) 許六

▲許六句集 蘇甘介我の著はせる、丈註釋の一卷中より、抄出せしものなり、古來許六句集として、單行本に出でしものを見ず。許六が句なほ漏れたるもあるべし。

▲韵悉 元祿九年の編にて、後半は李由が選する所なり、許六が俳文、同門及門人等との連句發句を輯めたる者。

▲箭突 元祿十一年の編なり、季節の解釋を一々發句に就て試みしもの、末に發句調録の辨、四梅盛賦飯食色欲箴あり。李由との共選なり。此書を去來の難じたるものに、湖東問答あり。

▲俳諧問答 元祿十一年の編なり、古き版もあれど、寛政十二年、月居が再刻したるあり、贈晋子其角書(去來)、贈落柿舍去來書(許六)、答許子問難辨(去來)、再呈去來書(許六)、俳諧自證之論(許六)、自得發明辨(許六)、同門評判(許六)等を擧げたり。卷末の同門評判見るべきものあり。

▲字陀法師 元祿十五年の編にて、俳諧の式法を述べたるものなり、今日次の一概を擧れば、俳諧選集法、當流活法、發句切字の事、七のマの事、大廻しの事、古實の句、古歌をとる格、物語の言葉、巻頭并俳諧一卷沙汰等、其他斯道に心得べき事項を論ぜり。李由と共撰なり。

▲歴代滑稽傳 正徳五年の編なり。俳人の畧傳及其風林のあらましを記したる者なり。巻尾に一枚起請といふ文あり。許六の抱負を窺ふべし。此れ許六臨終の著述にして、滿腔の熱氣諸處に沸々たるを見

る。

▲風俗文選 同門の俳文を集めしもの、寶永三年の編なり。

(五) 支考

蕉門に於て俳論を以て一世を風靡し、俳壇に美濃の一派を起したるは、東華坊支考にて、著書甚だ少なからず。

- ▲葛の松原 ▲笈日記 ▲綴五論 ▲四華集
- ▲東華集 ▲白陀羅尼 ▲三疋猿 ▲南無俳諧
- ▲夏衣 ▲阿難話 ▲俳諧十論 ▲發願文
- ▲三千化 ▲遊の羽風 ▲桃の首途 ▲三日月日記
- ▲十論爲辨抄 ▲綴五論 ▲本朝文鑑 ▲和漢文操
- ▲百花譜

△葛の松原 俳諧入門の手引とも謂ふべし、雪中庵鑿太の如きも、之れを手寫して座右に備へたりと云へり、元祿壬申五年五月の刊行にして、支考二十八歳の作なり。

- △笈日記 芭蕉が最後の行脚と、其病氣前後の日記と、支考が其舊遊の地を行脚せし句集なり、元祿乙亥八年八月の出版なり。
- △續五論 葛の松原の餘論を受けて、更に之れを細説し、委情の深意を定めたるものにして、元祿戊寅十一年十月の出版なり。
- △東華集、西華集 共に行脚中の句集なり、西華集は元祿十二年、東華集は同十三年九月の刊行とす。
- △白陀羅尼 俳諧の變化を吟詠に現はしたる句集にして、原本は元祿十七年二月の出版なり。
- △三疋猿 伊勢に遊歴して、涼菟が門に於ける聯句の巻なり。寶永元年五月刊行。
- △南無俳諧 國々俳諧撰集の偏頗を歎き、作る處の句集を示したるもの、寶永四年丁亥京都寺町通二條上ル町井筒庄兵衛より出版す。
- △夏衣 木曾より三越へ行脚の集なり、北七里に蕉門の俳諧を示すの辭及蕉門附方を誌す、寶永五年七月の出版なり。
- △阿難話 東華坊終焉の記及追善句集を収む、門人渡部狂の序文あれども、實は支考が自作にして、是れを以て東華坊の名を削り、門人に變體して、俳諧を世に行はんとせるの意に出でたるなり。正徳元年二月の刊なり。

(六) 蕉門雜著

- △俳諧十論 著者得意の俳論にて、以て支考の所見を窺ふべし、正徳四年の刊行なり。
- △發願文 五十年の非を悟りて發願したる文なりと自記せり、正徳五年三月の出版なり。
- △蓮の葉風 北國曲といふもの、歌仙解を評論したるものにて、三千化と共に享保九年の作なり。
- △桃の首途 三越地方へ行脚せし時の句集なり、原本三冊にして、享保十二年の刊行なり。
- △三日月日記 芭蕉が深川の草庵に入り來る人々の詠草を集めたるものにて、未だ全きものならざれど山口素堂の序を附して刊行せり、享保十五年、支考六十六歳の時なり。
- △芭蕉翁二十五條 一に白馬奥儀解と云ふ。所謂二十五條は、芭蕉翁の家訓なる由云へど、信を置くに足らず。例の東花坊が細工なるべし。
- △俳諧有耶無耶論 正しく芭蕉翁が作にて。正風の徒の金科玉條と頼めるもの明和元年の上梓なり。
- △蕉門俳諧語錄 五升庵蝶夢の蒐錄に係る。安永三年の上梓とす、其角、去來、支考、許六等、蕉門諸家の説を、項を分ちて編輯せり。
- △千鳥掛 正徳二年の編なり。芭蕉翁曾て尾州鳴海の千代倉知足の亭に宿りし時、「翁おもへらく、此所

は名古屋熱田に近く、桑名大垣へもまた遠からず、千鳥掛に行通ひて、餘生を送らんと、「星崎の千鳥の吟も此折のことなり。主人知足この言葉を耳に留めて、其程の風月を記し集めて、千鳥掛と名付けて、世に行はんとしたる折しも、程なく病歿したりしかば、其子蝶羽父の志を繼いで、印行したるなり。此書芭蕉門の外、談林派伊丹調の人々の句をも收めたり。

▲柿晋問答 去來、其角の問答なり。

▲山中問答 加賀の立花北枝の遺稿を、後に也同と云へる人の、世に公にせしものなり。

▲湖東問答 許六が篤突の著に對して、去來が自家の意見を陳べしものなり。

▲薦獅子 元祿六年の俳書なり。加賀の巴水が編する所に係る。序文に曰く、予滑稽の板短尺を思ひ立ち都鄙遠境の佳句を乞盡すあまりに、蕉門の句をもなくりて、我に興ふ、寫し得て是を舒卷し、日々に清靡にすむ。神慮にかなひけるよと、此名をこも獅子と烏帽子を着せ、桐の箱に房結んで、奉納し侍りぬ云々、以て此書の解題とすべきなり。

▲卯辰集 芭蕉翁の門人楚常之れを輯め、楚常歿後、立花北枝之を梓に上す、春夏秋冬の四巻と爲れり蕉門名家の句を見るに適す。卷尾の柿喰三吟、琵琶五吟、霜六吟また一種の趣味あり。

▲深川集 酒堂の選する所、芭蕉及其門弟の連句を窺ふべし。

▲有磯海 元祿二年秋芭蕉行脚して、門人浪化が住せる越中井波に辿り着き、「早稻の香や分入みちは有磯海」と吟せしより、此句を集の根ざしとなし、此一巻となせり。浪化は越中井波瑞泉寺の住僧にて應々山人とも號す、元祿十六年十月九日歿、行年三十二(或云三十三又三十四)。

▲芭蕉菴小文庫 元祿九年、史邦の編なり。深川長溪寺の禪師は芭蕉年來の語りひの友なれば、鯉屋杉風かの寺に一の塚をつき、更に宗祇のやどり哉と、書きおきし一紙を壺中に納め、かたの如く石碑を建て、霜枯の芭蕉を植ゆ、手向として、史邦、「日の影のかなしく寒し發句塚」と咏み、其縁によりて芭蕉翁を始めとし、其門弟等の發句等を集め、こゝに此集なりしなり。史邦は尾張の人、芭蕉の門弟にて、五雨亭とも號す。

▲俳諧瓜作(琴風編) 元祿時代の發句及び連句を集めたるものなり。元祿四年の梓行。琴風は生玉氏、芭蕉翁の門人にして、架羅架と號す。享保十一年二月七日歿、行年八十八。

▲青すだれ(秋香亭矩久編) 元祿當時の發句連句を集めたるものとす。序文は十萬堂來山なり。

▲新三百韻(其角編) 其角、如泉、言水、湖春、我黒、信徳、野水等十七名の百韻三巻を載せたるもの也。元祿三年の刻。

▲鶉衣 横井也有が青年より晩年に至るまでの文章を集録せしもの、其の歿後に於て、蜀山人等の鑑賞

をうけ、印行したるなり。

(七) 素堂

▲素堂句集 俳諧五子稿に收むる所を集めて刊行せり。

▲素堂文集 坎窩久藏會て素堂の文辭を輯めて、素堂家集と號す。寫本を以て稀に世に傳はれるものを刊行せり。

▲とくくの句合 素堂が自句を自ら評せし句合なり。

▲俳聯五十韻 素堂、知幾の漢語連俳なり。知幾の人物詳かならず、案ずるに當時の詩人なるべし。

▲松の奥 元祿三年の編なり。俳諧の式法を述べたるものなるが、此著信するに足らず。

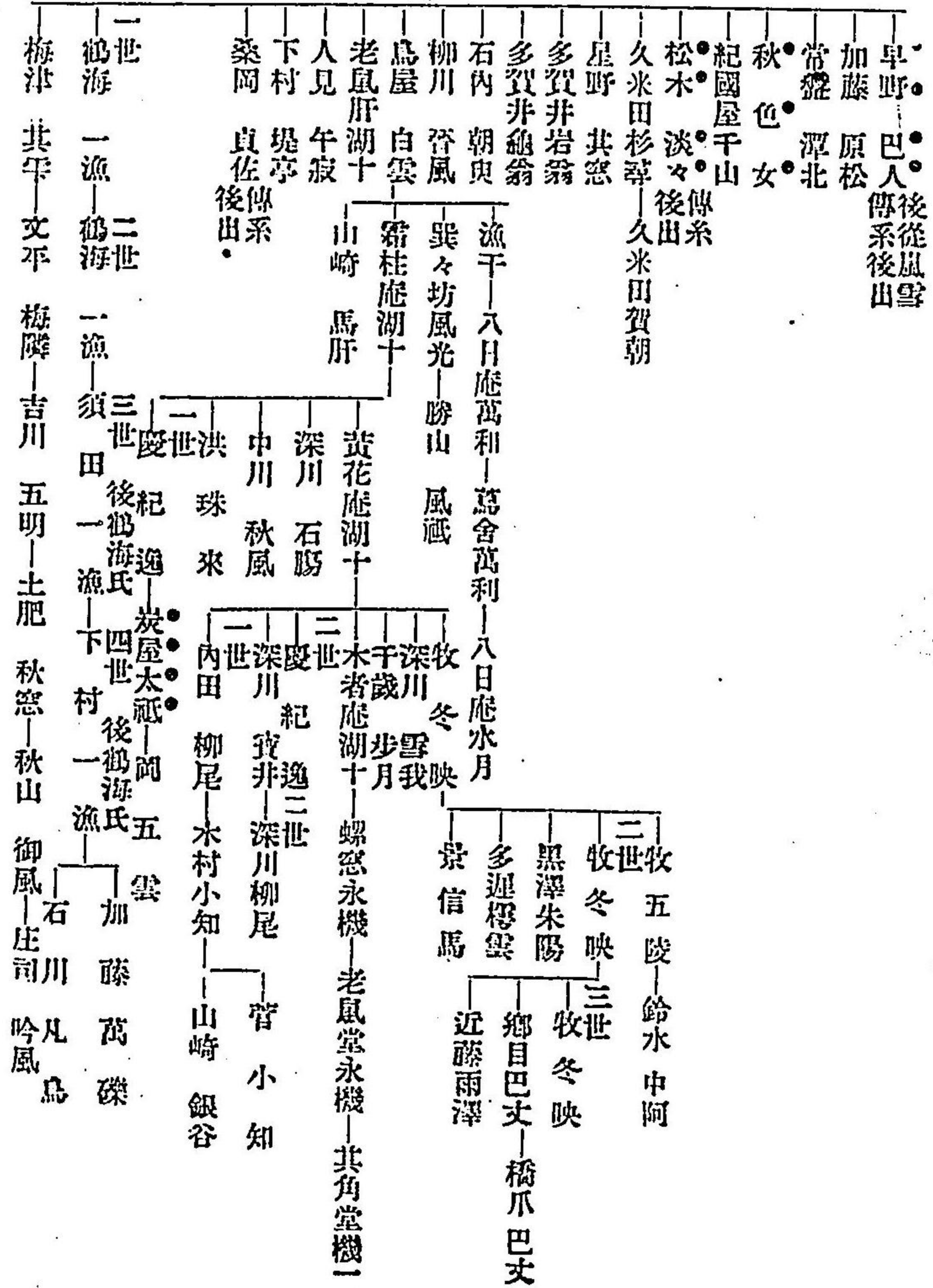
第十一章 蕉風俳系

▲松尾芭蕉 季吟門 (蕉風又正 風と云ふ)

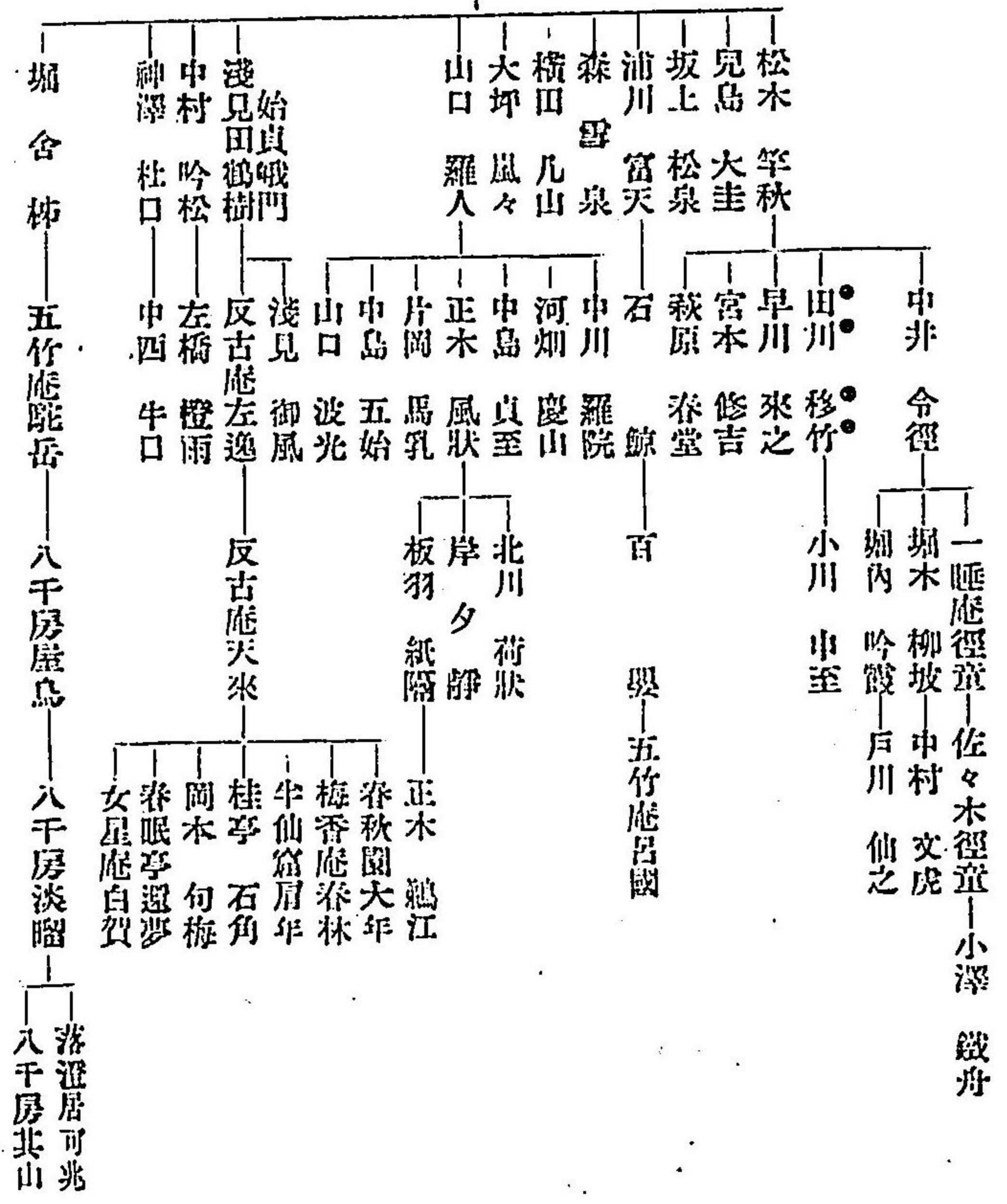
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 資 | 井 | 其 | 角 | 岩 | 柳 | 乙 | 服 | 部 | 風 | 雪 | 天 | 野 | 桃 | 隣 | 草 | 壁 | 舉 | 白 | 相 | 良 | 等 |
| 内 | 藤 | 丈 | 草 | 並 | 舍 | 羅 | 柳 | 陰 | 軒 | 勾 | 空 | 秋 | の | 坊 | 柳 | 一 | 笑 | 谷 | 木 | 因 | 坊 |
| 森 | 川 | 許 | 六 | 志 | 多 | 野 | 江 | 佐 | 尙 | 自 | 雲 | 小 | 杉 | 一 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 各 | 務 | 支 | 考 | 佐 | 保 | 介 | 松 | 岡 | 多 | 魚 | 濱 | 菅 | 沼 | 曲 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 向 | 井 | 去 | 來 | 山 | 木 | 荷 | 度 | 會 | 園 | 女 | 濱 | 菅 | 沼 | 曲 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 小 | 川 | 破 | 笠 | 南 | 杜 | 國 | 松 | 會 | 園 | 女 | 濱 | 菅 | 沼 | 曲 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 杉 | 山 | 杉 | 風 | 河 | 合 | 會 | 服 | 部 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 廣 | 潮 | 惟 | 然 | 南 | 合 | 會 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 越 | 智 | 越 | 人 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 春 | 花 | 凡 | 兆 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 立 | 花 | 凡 | 兆 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 五 | 雨 | 史 | 邦 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 釋 | 千 | 那 | 那 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 河 | 野 | 李 | 山 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 釋 | 浪 | 化 | 空 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |
| 稻 | 津 | 祇 | 空 | 松 | 倉 | 土 | 松 | 倉 | 土 | 芳 | 直 | 江 | 木 | 節 | 菅 | 沼 | 曲 | 小 | 杉 | 一 | 笑 |

(其他略之)

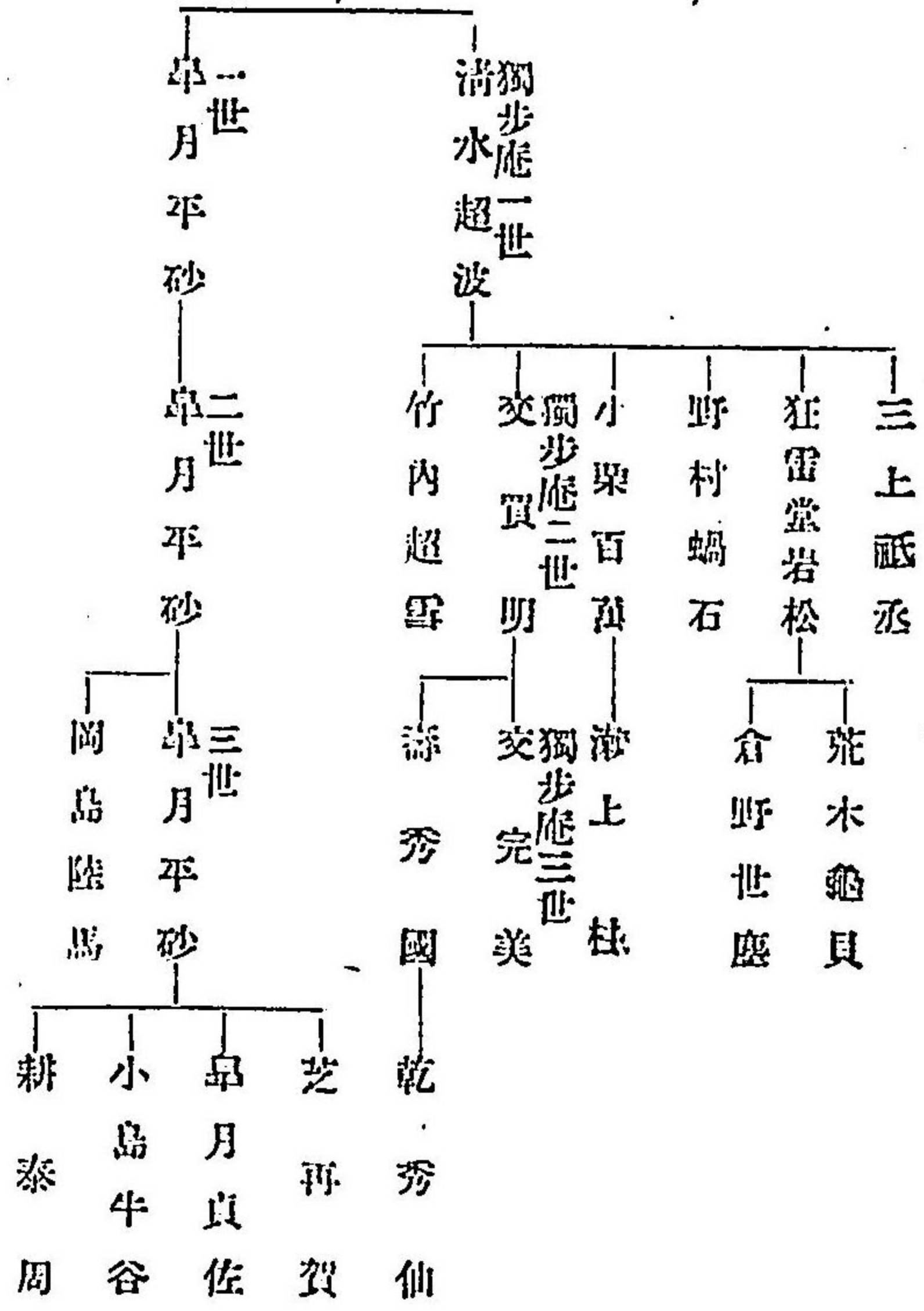
芭蕉門
寶井其角
(江戸座)



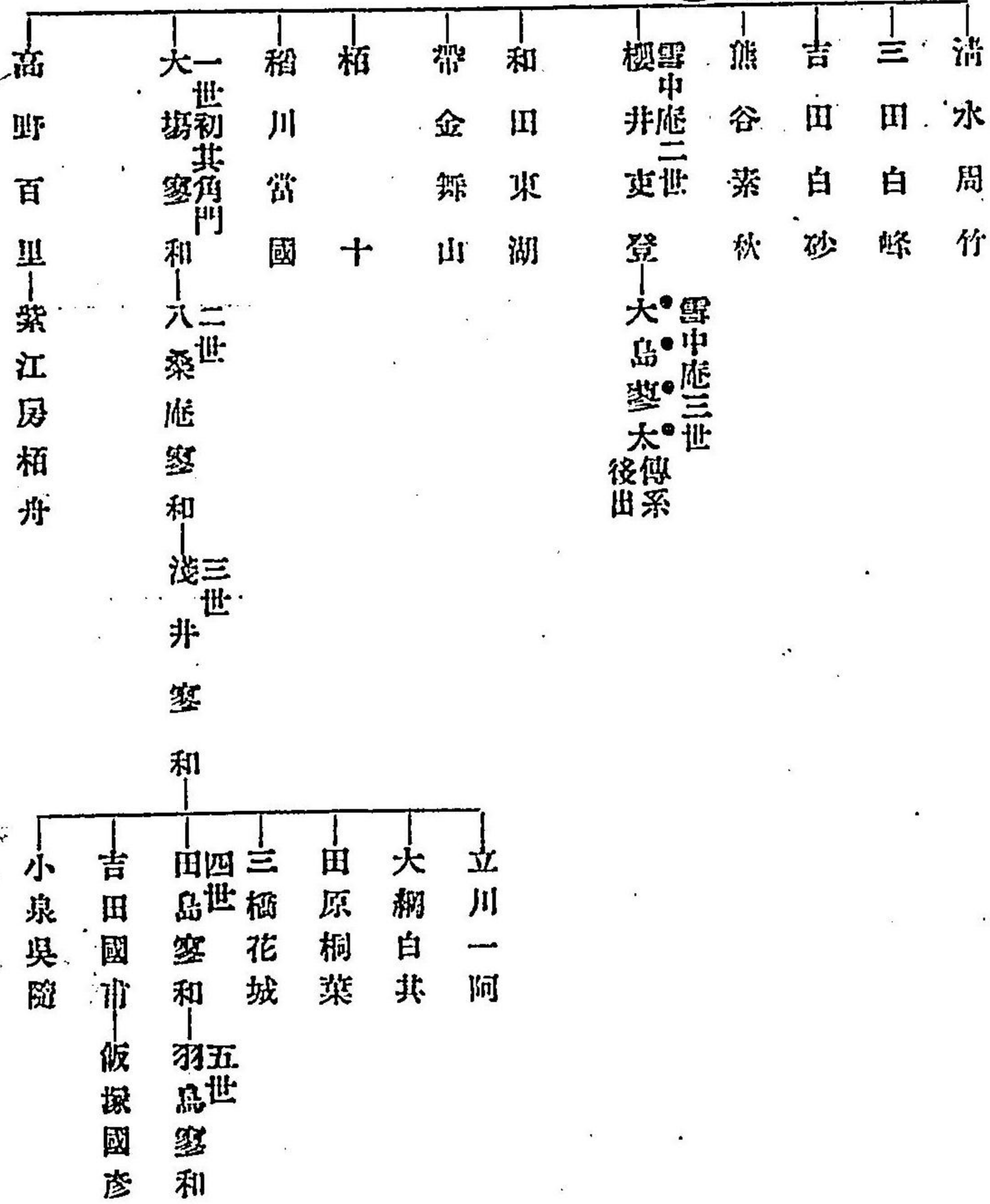
其角門
松木淡々

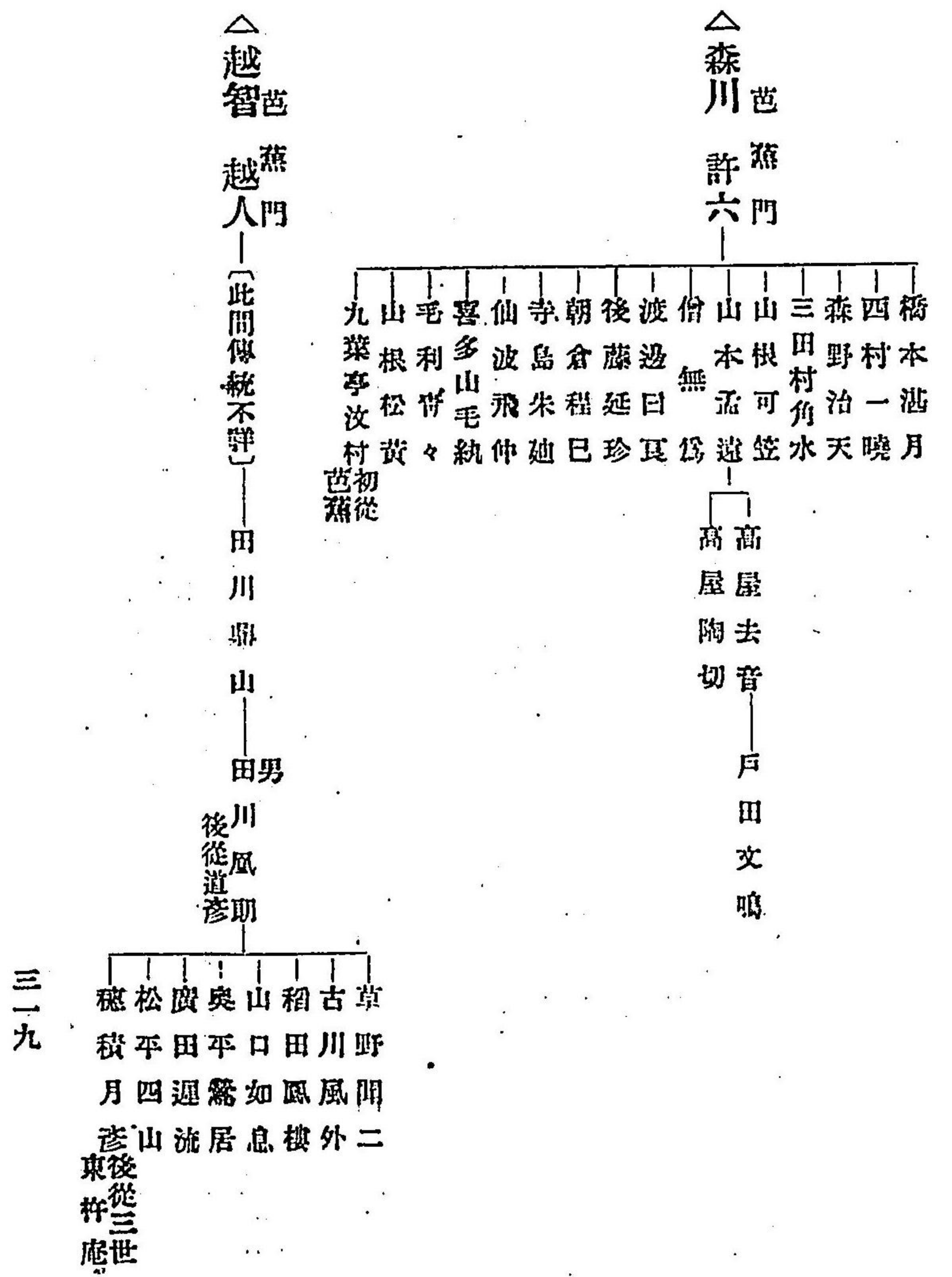
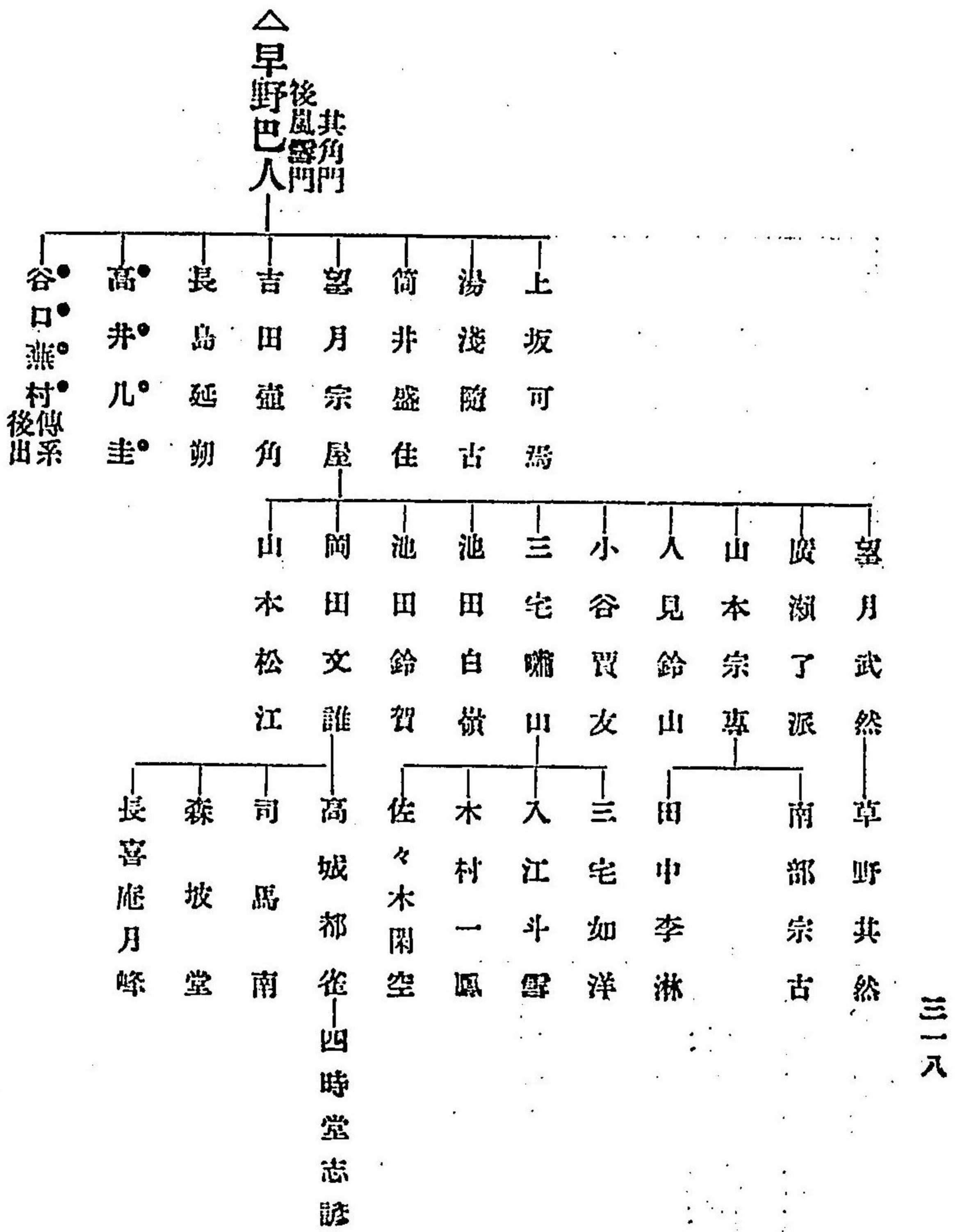


△桑岡 貞佐



△服部嵐雪
芭蕉門
雪中庵一世此
派を雪門と云





松永貞瑛
無外世眞羅
紅花鹿眞瑛
片窓江眞瑛
眞哉月舍芦汀

仲上法策阿賀鳥窓仲上五櫻松永貞居

竹野千鹿
轍魚貫
夏目宗成
夏目成美
小林一茶初門
竹内車丸門
豐島由誓
東義心非
星野花外
松堂貞祇

△稻津祇空
初貞德門
後芭蕉門
又背流と號す
此派を法而風
と云ふ

谷口樓川
東金羅
谷口鷄口
米原樓如
岸芝川
江圭川
桑山眞貞
上田眞貞
佐野眞貞
剛一二和軒

自在庵祇德
仲祇德
雪堂心祇
佐々木鷄冠女
萩原祇報

△志多野坡
芭蕉門
風
潮田萬李
律
中田凡十

△松倉嵐蘭
芭蕉門
松倉嵐戎

△釋千那
芭蕉門
釋七亭角上
二休停角々

△水田正秀
芭蕉門
四方郎朱淵

△五雨亭史邦
芭蕉門
松種文

△佐保介我
芭蕉門
砂岡我尙
長子
砂岡周午

△江作尙白
芭蕉門
津田之白
小宮山幸陀
武田菊峰

△柳川琴風
芭蕉門
篠田琴風

△服部土芳
芭蕉門
土田梨風

△松岡大魚
芭蕉門
松岡大蟻

△立花北枝
芭蕉門
佛
仙
子日坊一草
子日庵草齋
小笠庵草雨

第一章 徳川文學隆盛時代

谷口蕪村は、何時の頃より、金玉の名句を吐き始めたるかを知らず、記録の徴すべきは、其の師巴人、寛保二年に此の世を去り、蕪村後を繼いで夜半亭の號を襲ひ、諸國の歴遊、之れに關する俳句等、證とすべきもの少なからざれば、蕪村が天明の俳壇に於ける、第一の大立物たるだけに、之れを以て天明俳壇の發端とし、文化文政より、天保を経て、明治二十五年、新派俳句の濫觴前までを一括して、之れを網羅する事となせり。

寛保二年は、九代將軍徳川家重就職の前三年に當り、一旦元祿に發展せる文學藝術は、此に至りて聊か沈滞の觀なきに非ざれども、太平既に二百年、文化の中心は、今や全く江戸に移り、次で起るべき文化文政の盛時は、正に此の時代に胚胎せり。

天明俳壇の領
域

文化の中心江
戸に移る

曲亭馬琴四方
赤良

此の時代に於て、特に注目すべきは、國文學の發達、並に小説、戯文、狂歌の流行なり。是れ國民の自覺、漢文勃興の反動、及び平民的思想の萌芽に基く現象なるべし。即ち國學者に加茂真淵、本居宣長、村田春海、橘千蔭あり、歌人に小澤蘆庵、香川景樹あり、而して小説に於ては、古今獨歩の曲亭馬琴あり、又柳亭種彦あり、戯作者には、山東京傳、十返舎一九、式亭三馬あり、狂歌に四方赤良(太田南畝—蜀山人)、宿屋飯盛、朱良菅江、手柄岡持の徒あり。天明の俳客、谷口蕪村を始め、太祇、櫻良、曉臺、白雄、蓼太、關更等、亦た此の時代に輩出せり。而も俳壇の時代を劃するに、化政度の俳壇と云はずして之れを天明と稱するは、俳壇の勃興、聊か他の文藝の隆盛に先だつものあり、俳壇に於ける文化文政は、小林一茶の如き、特種の伎倆を有するもの無きに非ずと雖も、概して之れを云へば天明の餘勢を承けて、僅かに其の俳調を維持せるに過ぎざるものあるを以てなり。

天明俳壇勃興の理由に就ては、別に述ぶる所あれば、此に贅せずと雖も、文化文政後に於ける徳川文學の不振は、遂に善く俳壇の衰頹を伴ひ、天保を経て明治の中興に至る迄、二つながら共に語るに足るものなし。文化消長の關係、また頗る面白からずや。

第二章 天明調の特色

俳句を語らんと欲するものは、深く天明の盛時を研究せざるべからず、若しも俳句は既に元祿に成れり、天明は單に之を復興したるのみと云はんか、是れ未だ俳句を知らざるものなるべし。芭蕉は閑寂幽玄の唱道者にして、又其の成功者たり、天地自然を吟詠するに於て殆んど遺憾なきものゝ如し、然れども彼れの手は人事に及ぶに暇あらず、彼れの俳句は概ね單調なりしなり。即ち芭蕉の未だ及ばざりし人事と複雑との方面を唱道して、之に成功したるは蕪村なり。

蕪風以後の旗幟

左れば天明は、元祿の不足を補ふのみならず、其の餘勢を以て、俳句を大成したるものと云ふべく、芭蕉の俳句は、元祿に於て隆盛を極め、天明の新調は蕪風以外に於て、別に一旗幟を立てたるものと云はざるべからず。芭蕉は偉なりと雖も、蕪村は更に大なりと稱するを得ん。顧ふに天明の中興は、前代萎微不振の後を承けて、氣運漸く復活の曙光を呈せんとするに當り、蕪村の崛起するに逢うて、天下靡然として之に傾きたるものにて、其の中心の蕪村たる事には、何人も異議なき如くなれども、世に六俳客と稱する、「柳良、蕪村、蓼太、白雄、曉臺、關更等の排列の順序に至つては、單に其の當時の表面に現はれたる勢力を見て然か云ふのみ、俳句中興の實際の功勳を論ずる時は、未だ必らずしも然らず、殊に曉臺の門人梅間が、其著『力草』に於て、

正風中興の事、蕪村、曉臺、心を合せて、柳良、白雄、關更、青蘿など勸めて、正風吹き起りしなり。

天明の六俳客

と云ふが如き、天下の事は、素より一人の力の及ぶ所にあらず、樗良、曉臺、は云ふも更なり、蓼太の如きも亦た論功行賞の列に入るを妨げずと雖も、徒らに皮相の見に驅られて、其の裏面に尙ほ大勢力の伏在せるを忘却したるは、偶々以て當時の俳人の見地の甚だ低かりしを察するに足る。我等をして之れを云はしむれば、天明中興の功勳者は燕村第一、太祇第二、曉臺、樗良の如きは、其の後に位すべく、白雄、蓼太をして、また其の次ぎに居らしめんとす。而も是れ天明中興の功績に就て然か云ふのみ、若し夫れ身後に其の名吟を遺して、後來の爲に模範を示したるの功績より論ずる時は、几董、召波を摘て曉臺の前に置かざるを得ざるものあらん。乞ふ當時の俳勢を表示し、更に其の人物を中心として、天明の盛時を語らん。

△燕村(江戸派) 几董、召波、月居、大魯、百池、月溪、

△曉臺(美濃派) 白居、士朗、素樂、樗堂、

欠

MISSING

見え、其の地の景情を句に詠めるものあるも、記行なければ詳かならず、斯くて一般の俳壇は、黠取と飲食とに忙しくして、益々墮落の方向に傾ける間。に彼れは自然と人生とに接して、深く其俳想を涵養せり、晩年京に住して、盛んに天明調の俳句を吐くと共に、又繪畫の筆を執て自ら樂しめり、蕪村に俳諧を學びしものには、月居、月溪、召波、几圭、几董、維駒等の徒あれども、几董獨り其の堂に上り、師號を繼で三世夜半亭と稱す。蕪村、天明三年十二月二十四日夜没す、行年六十八、遺骸は洛東金福寺に葬る、几董の筆に成れる「終焉の記」は、臨終當時の有様を窺ふに足るものあれば、左に之を録す。

蕪村終焉記 (から拾葉)

おしてゐるや浪速江ちかきあたりに生ひたちて、とりが鳴くあづまのかたに多くの春秋を送り、猶奥の隈々歴遊しつゝ、うちひさす都を終の栖と定め、おもふ事なくてや見ましと、よつの浦天の橋立の邊りに、三とせの月雪をながめ

ふたゝび花落にかへりて、谷氏を與謝とはあらため申されし也。抑此翁無下にいはけなきより書を好み、年をつみ南北二宗を寫得し、終に筆あり墨あるの妙にいたれり。はた弱冠の比より俳諧に耽り、蕉翁晋子の高邁を慕ひ、かたはら諸家の支流にわたり、縦横自在なる事、集めて大成すといふべし。明和のはしめ、京師に再び先師巴人の業をつきて夜半亭と號し、「花守の身は弓矢なき案山子哉」爰において其風調をしたひ、履を倒にして門に入るもの少からず。然れども元來習俗に觸るゝ事を厭ふの癖あれば、なべて世の人と交るものうしと、門戸を閉ぢ書室にこもり、はつかに同調の徒と志を通じ意を適に遊ばんとて、「なか／＼にひとりあればそ月を友」、もとより老情懶惰なりといへとも、老當_三壯_一と恒に伏波將軍が語をつぶやき、行住座臥翫弄衣食に就ても、嬰_三鏢_一哉是翁也と人もうらやみ侍りけり、かねて平安の致景を愛し、東郊西山の花紅葉をも見殘さず、ことし秋の末、門人毛條に招かれ、宇治の奥田原といふ所に杖を

引きぬ、絶壁懸河、奇石怪岩に眼をよろこばしめて、「帛を裂く琵琶の流や秋の聲」、是は白氏が四弦一聲如裂帛といへるにもひよせしとぞ。かくてその秋も過ぎ、冬枯の寒もしくれかちに、蟋蟀艸廬の戸をすたき、朝ゆふの風衣を透す比ひより、何となく氣力安からず、腹痛老身を苦しめ、日毎に惱みかちなりければ、あはやと人々訪ひよりて、服藥怠る事なく介抱大かたならず、もてかしのき侍りぬ。されと老病日増に篤く、醫療さまざまに心を用といへともしるしなれば、おの／＼庵中にあつまりて、かはる／＼病床にまゐり、とさまかくさま老情をなぐさめ侍りけり。或時予を枕上にまねきて、此ほど病苦のねさめにも『五車反古集』の序の事忘れねは、手ふるひ心まとひぬれど、からうじて筆とり置たり、とく維駒に傳へて父が孝養の志を欠くべからずと聞えける。是ぞ生前筆の採りおさめにして、いかなれば召波父子かく因縁の淺からず、かの集に洩さる事のありがたきを、今更に感じ侍りぬ。又ある夜伽のものに對し

て、かうやらの病に觸つゝも、好める道のわりなくて、句案にわたらんとするに、夢は枯野をかけ廻るなどいへる妙境、及ぶべしとも覺えず、されば蕉翁の豪傑なる事、今はた感に堪へざるはなど、日比にかはらぬむつまじき教へ草、さしかたみにやなりもせんと、ひと度は悦び、一たびは胸ふたがりけり。かくて十二月半の日來は、病毒下痢して惱み漸く癒たるに似たれども、食氣欲する事なく、心身倦み勞れて、日毎にたのみ少く見えけるにぞ、打よりて唯命運を祈るばかり也。妻娘をはじめ、月溪、梅亭の輩、且暮起臥を扶けて、師につかふまつるの志切なるも、二十二日二十三日の夜は、ことに打うめきて、あわすにぞ、いと心細く、覺束なくて、病顔をうかゞひつゝ、後の事などいさゝかほのめかし聞えければ、いやとよ、つらく來しかたをおもふに、野總與羽の邊鄙にありては、途に煩ひある時は飢もし、寒暑になやみ、うき旅の數々命つれなく、からきめ見しもあまたゝびなりしか、今此帝都に居を安じ、たまゝ病

に犯さるゝといへども、醫藥疎かならず、人々のまことを盡し残るかたなき介抱も、如何なる宿世の契り淺からざるをや、愚老が本懐足る事をしれり、されど世つかぬ娘が行末など、愛執なきにもあらねど、なからん後は、そこら二三子情もあるらん、よしあしやなにはの事も、觀念の妨げなるはと、物打かつぎて答へなければ、せんすべなくて蹲り居りぬ。二十四日の夜は病體いと靜に、言語も常にかはらず、やがて筆硯料紙のやうのものとり出る間も、いそぎ筆とるべしと聞けるにぞ、やがて筆硯料紙のやうのものとり出る間も、心あはたゞしく吟聲を窺ふに、

辨村病中の吟

冬 鶯むかし 王維か垣根哉

うくひすや何ごそつかす藪の霜

ときこえつゝ、猶工業のやうすなり、しばらくありて又、

しら梅に明る夜はかりとなりけり

こは初春と題を置くべしとぞ。此三句を生涯語の限りとし、睡れる如く臨終正念なして、めでたき往生をとげたまひけり。母子の歎きはいふもさらなり、此の夜晝のわかちなく附添ひありしともがら、腸をたち足すりをすれども、そのかひなし。]やがて曉の戸敲きて斯くと告るにぞ、田福、百池、我則、佳棠、如瑟、楚秋、魚宦、集馬、その外親しき人々も、須臾に馳せあつりて、生前のむつび死別のびんなきかたみに、いふべきことの葉もなく、只よくと泣き惑ふばかり也。さてしもあるべきことならぬば、かねて遺言に任せ、病床の夜のもの拂ひ、清き毛氈を敷きしとねとし、常の衣服の垢つかざるを撰びて、襟かひつぐらひ、居士衣を襲ひ、紗巾を冠らしめ、生ける人のごとく粧ひたて、頭北面西右脇臥にして、香を焼き華を供し、寺僧を迎へ、各唱名を念佛し、ひそかに亡體はけふりとなしぬ。

第四章 蕪村の俳句

蕪村は批評家にあらずして作家なり、彼れの俳句を作るや、常に文學の上に着眼せり、故に彼れの句には教訓的のもの極めて少なきも、其の句の現今に存するもの千數百句、文學上より之れを論ずる時は、棄つべきもの殆んどあるなし。芭蕉は多くの句を吐けり、然れども彼れの眼孔は、未だ純文學として俳句を見る迄に進歩せず、或は教訓の意を寓し、或は禪意を之れに加味するなど、俳句の爲めの俳句に非ずして、或る他の目的の爲に俳句を作るの傾きありしなり。然るに蕪村は之れに反し、全く俳句の爲に俳句を作り、純文學として之れに努力したるの形跡は、歴々として作句の上に徴すべし。芭蕉の天稟を以てすら、尚ほ仔細に其の句を吟味する時は、駄句甚だ多きを免かれざるに、蕪村句集の千數百句が、悉く金玉と迄は行かざるも、概ね雅句なるは、古來殆んど例なき

蕪村俳句の爲に俳句を作る

所にして、蕪村が他の俳人より、挺然として一頭地を抜く所以は、全く此に在りと云はざるを得ず。芭蕉も各種各様の句を作れり、然れども蕪村は更に一層多くの様式を創めて、之れを大成したり。彼れが作句上の伎倆は、此の意味に於て、寧ろ芭蕉の上に在りと云ふて不可なかるべし。

明治俳壇の傑人正岡子規は、我國最初の蕪村研究者にして、又最後の蕪村研究者たり、蓋し恐らく何人も其の著『俳人蕪村』以上に蕪村研究の結果を發表し得るものなかるべければなり。左れば今此に蕪村の句を例示するに當り、『俳人蕪村』の分類法に従つて、之を掲ぐる事とせん。

△積極的美

| | |
|---------------|----|
| 方百里雨雲よせぬ牡丹かな | 蕪村 |
| 絶頂の城たのもしき若葉かな | 同 |
| 五月雨や大河を前に家二軒 | 同 |

| | |
|--------------|---|
| 女俱して内裏拜まん朧月 | 同 |
| 片町にさらさ染るや春の風 | 同 |

△客觀的美

| | |
|---------------|---|
| 釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな | 同 |
| 小原女の五人揃ふて袷かな | 同 |
| 夕風や水青鷺の脛を打つ | 同 |
| 四五人に月落かゝる踊かな | 同 |
| 鍋提げて淀の小橋を雪の人 | 同 |

△人事的美

| | |
|-----------------|---|
| 少年の矢數問ひよる念者ぶり | 同 |
| 鮒つけてやがて去にたる魚屋かな | 同 |
| 御手打の夫婦なりしを更衣 | 同 |

禪に團扇さしたる亭主かな
沙彌律師ころりくと衾かな

同 同

三四六

△理想的美

湖へ富士を戻すや五月雨
瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨
實方の長櫃通る夏野かな
追劔を弟子に刺りけり秋の旅
鬼貫や新酒の中の貧に處す

同 同 同 同 同

△複雜的美

燕啼いて夜蛇を打つ小家かな
雨後の月誰そや夜ぶりの脛白き
鮮をさす我れ酒かもす隣あり

同 同 同

鹿ながら山影門に入日かな
水かれく蓼かあらぬか蕎麥か否か

同 同

△精細的美

鶯の鳴くや小さき口あけて
瘦牖の毛に微風あり衣がへ
夏川をこす嬉しさよ手に草履
蚊の聲す忍冬の花散るたびに
齒あらはに筆の氷を噛む夜かな

同 同 同 同 同

△漢語調

指南車を胡地に引き去るかすみ哉
祇や鑑や髭に落花を捻りけり
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

同 同 同

三四七

時鳥平安城をすぢかひに
春水や四條五條の橋の下

三四八

△古語調

およぐ時よるべなきさまの蛙かな
おろしおく笈になるふる夏野哉
夕顔や黄に咲いたるもあるべかり
夜を寒み小冠者臥したり北枕
大高に君しろしめせ今年米

同

同

同

同

同

△俗語調

出る杭を打たうとしたりや柳かな
酒を煮る家の女房ちよとほれた
杜若べたりと鶯のたれてける

同

同

同

薬喰隣の亭主箸持参
化さうな傘かす寺の時雨かな

同

同

△變化多き句法

春風や堤長うして家遠し
雉打て歸る家路の日は高し
玉川に高野の花や流れ去る
裏門の寺に逢着す柳かな
月に對す君に投網の水烟
鮓を壓す石上に詩を題すべく
頭巾二つ一つは人に參らせん
鮓桶を洗へば淺き遊魚かな
罌粟の花まがきすべくもあらぬ哉

同

同

同

同

同

同

同

同

同

三四九

春の水背戸に田つくらんとぞ思ふ
緑子の頭巾眉深きいとをしみ
更衣八瀬の里人ゆかしさよ
春の夜や宵曙の其中に
三椀の雑煮かふるや長者振
燕や水田の風に吹かれ顔
行く春やおもたき琵琶の抱き心
同 同 同 同 同 同 同 同
△變化多き句調
宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ
若葉して水白く麥黄ばみたり
春風や人住みて煙壁を漏る
花を踏みし草履も見えて朝寝かな
同 同 同 同 同 同 同 同

閑古鳥かいさゝか白き鳥飛びぬ
月天心貧しき町を通りけり
獨鈷鎌首水かけ論の蛙かな
夜桃林を出で、曉嵯峨の櫻人
おもかげもかはらけく年の市
心太さかしまに銀河三千尺
嵯峨へ歸る人はいづこの花に暮れし
朝顔や手拭の端の藍をかこの
梅遠近南すべく北すべく
閑古鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ
をちこちをちこちと打つ砧かな
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

其の文法、材料縁語等に就ても、蕪村の用法は、他に異なる所頗る多けれども、

一々此に擧ぐるを得ず。

『蕪村文集』に收むるものに、「春風馬堤曲」と稱する、一種風變りのものあり、俳句に交るに、漢詩を以てし、一篇の脈絡、斷ふるが如く、續くが如き間に、能く首尾を貫通し、然も之れを離して一句とするも、亦た誦するに足る、思ふに是れ漢詩の調を借りて、連句を真似たるものか、或は俳句の調子を借りて古詩に擬したるものか、何れにもせよ、讀んで少なからざる情趣を感ずるものあり、古來例なき一篇の詩たり、左に掲げて蕪村研究の一材料に供ん。

春風馬堤曲 十八首

余一日問耆老於故園、渡澗水過馬塘、偶逢女歸省鄉者、先後行數里、相願語、容姿嫵媚癡情可憐、因製歌曲十八首、代女述意、題曰春風馬堤曲、

やぶ入や浪花を出て長柄川
春風や堤長うして家遠し

| | |
|----------------|-------|
| 堤下芳草 | 荆與棘塞路 |
| 荆棘何無情 | 裂裙且傷股 |
| 溪流石點々 | 踏石撮香芹 |
| 多謝水上石 | 教儂不沾裙 |
| 一軒の茶店の柳老にけり | |
| 茶店の老婆子儂を見て慰懃に | |
| 無恙を賀し且儂か春衣を羨む | |
| 店中有二客 | 能解江南語 |
| 酒錢擲三緡 | 迎我讓揚去 |
| 古驛兩三家猫兒妻を呼妻來らず | |
| 呼雛籬外鷄 | 籬外草滿地 |
| 雛飛欲越籬 | 籬高隨三四 |

春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ
蒲公英花咲り三々五々五々は黄に
三々は白し。記得す去年此路よりす
憐しる蒲公英莖短して乳を混
むかしく頻におもふ慈母の恩
慈母の懷袍別に春あり
春あり成長して浪花にあり
梅は白し浪花橋邊財主の家
春情まなひ得たり浪花風流
郷を辭し弟に負て身三春
本をわすれ末を取る接木の梅
古郷春深し行々て又行々

澗川歌

楊柳長堤道漸くくれたり
矯首はしめて見る故園の家
黄昏戸に倚る白髮の人
弟を抱き我を待つ春又春
君不見古人太祇の句
藪入の寝るやひとりの親の側

澗川歌三首

| | |
|-------|-------|
| 春水浮梅花 | 南流菟合澗 |
| 錦纜君勿解 | 急瀬舟如電 |
| 菟水合澗水 | 交流如一身 |
| 舟中願同寢 | 長爲浪花人 |

君は水上の梅の如し

花水に浮て去ること急也

妾は江頭の柳のことし

影水に沈てしたかふことあたはず

老 鶯 兒

春もや、あな鶯よむかし聲

春もさむき春にて御座候、いか、御暮被成候や、御ゆかしく存候、しかれば春興小冊漸出板に付、早速御めにかかけ申候、外へも乍御面倒、早々御達被下候、延引に及候故、片時はやく御届可被下候

一春風長堤曲 長堤は毛馬塘也則余か故園也

余幼童之時春色清和の日には、必友どちと此堤上へのぼりて遊び候、水には上下の船あり、堤には往來の客あり、其中には田舎娘の浪花に奉公してかしく浪花の時勢粧に倣ひ、髪かたちも妓家の風情をまなび、□傳しげ太夫の

心中のうら名をうらやみ、故郷の兄弟を耻いやしむ有り、されども流石故園情に不堪、偶々親里に歸省するあた者成べし、浪花を出てより親里迄の道行にて、引道具の狂言座元、夜半亭と御笑ひ可被下候、實は愚老懷舊のやるかたなきより、うめさ出たる實情に候、

當春狀は同盟の社中斗にて、他家を交へす候、それ故伏水の諸家をも洩し申候、御出會の節、其御噲被成、諸子腹立なき様に、□□□可被下、桃には下候て、寛々御物かたり可仕候、敷狀した、め、老眼つかれ艸々以上、

何や個や、取混ぜての書方にて、甚だ亂雜がましき次第なれども、一讀せば、「馬堤曲」の謂はれも知り得べく、又彼れの情緒が、物に當つて如何に感ずるかを察すべし。書簡の終りに、「老眼つかれ云々」とあるを見れば、彼れが晩年の筆たるや疑なし、真似の出來ざる作と云ふべし。

第五章 蕪村の俳論

蕪村初期時代の句

蕪村は、俳句中興の英傑にして、元祿以後百年、僅に一指を屈すべき俳人なり。苟も俳句を語らんと欲せば、元祿の俳風を知ると同時に、また天明の俳風を研究せざるべからず、餘子碌々、其の一斑を示すべき俳句を掲ぐれば足れりとするも、蕪村に至ては、更に之に説明を加ふるの必要あり、是れ元祿の俳風が芭蕉に因て代表せらるゝと同じく、天明の俳風は、蕪村に依て代表する事を得ればなり。而して又、後來明治俳壇の勃興が、一部の蕪村句集に負ふ所、頗る多大なるものあればなり。蕪村の俳歴を叙するに當り、其の初期時代の句を求むるに、門人東阜の遺稿に、蕪村が二十四五歳の作なるべしとあるは、

柳 ちり 清水 涸れ 石 ところ へ

蕪 村

の句なり、見るべし、印象明哲、配合宜しきを得て、句法の斬新なる、彼れの

詩才が、如何に當時の俗俳と其の選を異にせるかを、天明新風の眼は、既に此の時に開けたり、必らずしも將來の蕪村を待たず、俳句をして真に文學の價値を全うせしめたるは、全く此の蕪村より始まる。左れば蕪村の俳句には、芭蕉のそれの如く、著しき變化を見ず、唯だ年と共に益々成熟したりと云ふの外なかるべく、殊に蕪村並に其の一派の人々は、元祿當時に於ける蕉門の徒の如く、敢て門戸を張らんとするの野心なく、何れも皆高潔無欲にして、其の俳句論を賣り其の俳論を嚮きて、名を得、利を貪らんとするの愈極めて少なければ、随つて蕪村の俳歴の研究には、芭蕉ほどに多くの材料を得る能はず、是れ甚だ遺憾の事なれども、蕪村の蕪村たる所以が、全く此に存すると思はゞ、深く惜しむにも足らざるべきか。蕪村句集は、素より彼れの俳風を研究するに必要な材料なり、然れども彼れの俳句に對する意見を聞かんと欲せば、是非とも蕪村文集を繙かざるべからず。芭蕉の所謂「不易流行」に對し、彼れは「桃李序」